日本醫史學雜誌

第20巻　第1号

昭和49年 1 月 30 日発行

第74回日本医史学会総会
渡来百五十年記念シーボルト顕彰記念会特別講演
シーボルトと門人……緒方　富雄…(1)
Anatomia Reformata. The Dutch Handbook of Anatomy from the Baroque Period; the Contents and Presetation
……A. M. LUYENDIJK-ELSHOUT…(104)
シンポジウム：医師としてのシーボルト
シーボルトの処方……小川　鼎三…(40)
画家の眼を開いたシーボルト……兼 重　護…(46)
シーボルトと長州……田中　助一…(53)
シーボルトの治療法……中 野　操…(59)
蘭学史におけるシーボルトの役割……沼田　次郎…(64)
医師としてのシーボルト……山形　敞一…(71)
日本眼科史上のシーボルト……福島　義一…(76)
雑　報……(86)

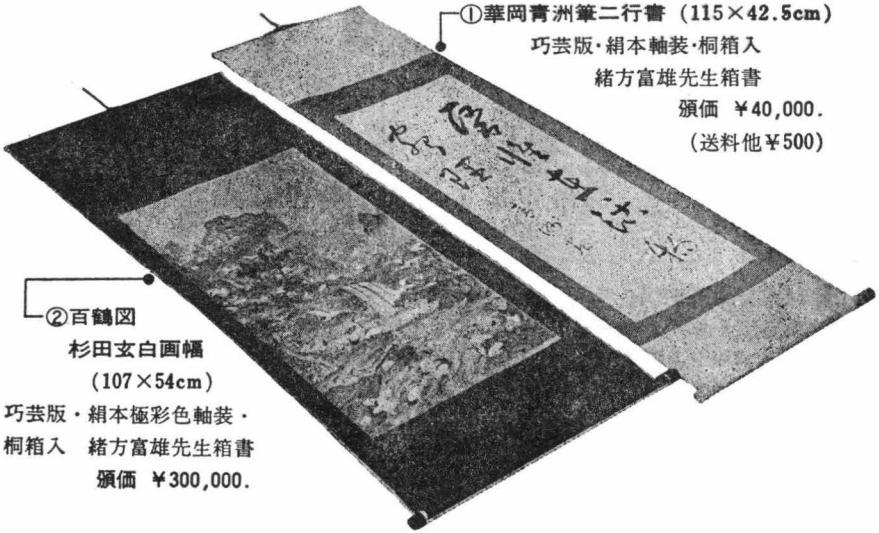
通 巻 第 1395 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2—1—1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京 15250 番
電話 (813) 3111 内線 544

金原出版
創業百年記念事業

醫學の寶玉



①華岡青洲筆二行書（115×42.5cm）
巧芸版・絹本軸装・桐箱入
緒方富雄先生箱書
頒価 ￥40,000.
（送料他￥500）

②百鶴図
杉田玄白画幅
（107×54cm）
巧芸版・絹本極彩色軸装・
桐箱入　緒方富雄先生箱書
頒価 ￥300,000.

わが国医学の宝玉を完全復元

好評頒布中！

醫聖 杉田玄白立像

日展評議員 長谷川義起 作

偉大な玄白と、似る、という二つの構成上の要素を、造形芸術として、調和の世界を彫り上げよう、昇華させようと繰返し追求して、出来上がったのがこの像である。

ブロンズ立像（高さ35cm）桐箱入・長谷川義起先生箱書

頒価三〇〇、〇〇〇円

① 「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。世界の近代外科の先駆となった華岡青洲は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

② 百鶴図は、杉田玄白が六十歳の誕生日に仕上げたもので、繊細華麗に描かれている。製作は技術の粋を尽し独自の手法により復元、仕上げ部分は手描きによる。

売捌所／株式会社金原商店　製作所／財団法人日本医学文化保存会

第74回 日本医史学会総会 特別講演
渡来百五十年記念シーボル顕彰記念会 昭和四十八年十月八日

シーボルトと門人

緒方富雄

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月 昭和四十八年十二月十二日受付

内容

一、記念されるシーボルト
二、シーボルトまでの時代
三、シーボルトのおいたち
四、シーボルト日本へ
五、シーボルトの活動とそれをたすけた人々
六、シーボルトの活動をささえた人々
七、門人はシーボルトの仕事をどのようにたすけたか？
八、シーボルトは門人の提出した蘭文資料をどのように利用したか？
九、むすび
引用文献

一、記念されるシーボルト

シーボルト（Philipp Franz von Siebold）（一七九六―一八六六）が長崎の出島についたのは、一八二三年八月十一日（文政六年七月六日）で、それから六年間日本にいて、長崎を去ったのは、一八二九年十二月三十日（文政十二年十二月五日）でした。それはシーボルトの二十七歳から三十三歳までのあいだにまたがっております。

今年はシーボルトが日本へ来た年からかぞえてちょうど百五十年にあたりますので、長崎ではこの機会に渡来百五十年記念シーボルト顕彰会を組織され、今朝九時からは出島の旧蘭館趾において出島史学顕彰薬園碑所在標の除幕式があり、いまここに記念講演会を開催されました。その講演会の講演をわたくしに命ぜられましたことを、まことに光栄に存じます。

ふりかえって見ますと、むかし日本へ来た外国人のなかで、シーボルトほどひろく知られ、ながく人気のある人はすくないとおもいます。それは、シーボルトを記念する行事の数や質からいいましても、シーボルトについてて書かれたものの数がたいへん多いことからいいましても、よくわかるのであります。記念行事のおもなものを記録からひろってみますと、つぎのようなものがあります。

明治十二年三月十日（一八七九）

長崎諏訪公園内に「施福多君記念碑」建設。この碑建設の由来については、あとに述べます。

明治二十九年二月十七日（一八九六）

東京上野精養軒においてシーボルト誕生百年記念会開催。その記念出版として呉秀三「シーボルト」出版（一月）。

明治三十年三月（一八九七）

鳴滝宅趾に「シーボルト先生宅趾」碑建設。

大正十一年十月十二日（一九二二）

鳴滝宅趾が内務大臣より史蹟として指定。

大正十二年（一九二三）

長崎においてシーボルト渡来百年記念事業計画。この年九月一日関東大震災により延期。

大正十三年四月二十七日（一九二四）

鳴滝宅趾においてシーボルト渡来百年記念式典挙行。同所にシーボルト胸像建設。胸像は東京美術学校教授水谷鉄也氏作。

長崎県立図書館においてシーボルト渡来百年記念展覧会開催(四月二十七日より二十九日まで)。同講演会開催。

「シーボルト先生渡来百年記念論文集」刊行(四月)。

大正十五年十月(一九二六)

呉秀三「シーボルト先生其生涯及功業」(第二版)(文献一)刊行。

昭和十年(一九三五)

東京上野東京科学博物館において「シーボルト資料展覧会」開催(四月二十日より五月二日まで)同目録刊行。

東京科学博物館講堂において同講演会開催(四月二十六日)。

昭和十三年六月(一九三八)

「シーボルト研究」(日独文化協会編)(文献二)刊行。

昭和四十一年十月二十六日(一九六六)

ケンペル没後二百五十年、シーボルト没後百年記念講演会開催。

同講演集(Gedenkschrift. Supplementband XXVIII. Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tokyo 1966)(文献三)刊行。

シーボルト関係の記念論文、研究論文、紹介文については、わたくしと沼田次郎教授編の「シーボルト関係文献目録」(文献三)をごらんください。その量は十八印刷ページにわたっております。

シーボルトへの関心は、日本だけにとどまりません。シーボルトに関する研究は主としてドイツでおこなわれていますが、シーボルト自身の著作中もっとも有名な NIPPON(「日本誌」)(文献四)の複製や、シーボルトの二人の息子が編集

した第二版（文献五）の出版、その複製、それからドイツ語から他国語への翻訳などさかんにおこなわれました。復刻版は最近にもドイツから出ています。

記念碑は、シーボルトのうまれたドイツのウュルツブルグにあるのが有名ですが、これの興味ある由来については呉先生の本（文献一）に紹介されております。この碑は一八八二年十月八日（明治十五年）、ウュルツブルグでおこなわれた Frankisches Gartenbauverein（フランケン造園連合）の第二十五回創立記念会のときに除幕されたもので、土地は市が提供し、碑を建設したのは Kaiserliche Königliche Gartenbaugesellschaft in Wien（ウイン帝室造園協会）およびシーボルトの尊敬者という名儀になっています。像はミュンヘン美術学校教授クリスチアン・ロート氏（Christian Roth）の作です。なぜこの造園協会が記念碑をたてたのかといいますと、一八七三年（明治六年）の同協会の会合の席で、シーボルトが日本から多くの目新らしい樹木をヨーロッパに導入したという顕著な貢献を感謝し記念するために、ウュルツブルグに記念碑を建てようという提案が可決されたからです。それで協会は翌年ヨーロッパ、アメリカの、造園で有名な都市に支部をおき、寄付金の募集をはじめました。日本でもこれに応えて、明治八年（一八七五）に会を組織し、寄付金を募集することになりました。そのとき、オランダ公使の発言で、この寄付金の一部をもって、シーボルトゆかりの地日本にも一基建てることが議決されました。これが実現したのが、明治十二年三月（一八七九）に長崎の諏訪公園に建った「施福多君記念碑」です。その由来はこの碑にくわしく書かれています。このようにこの碑はもともと日本人が発起して建てたのでなく、ウィーン帝室造園協会の記念事業の一環として建ったのです。

なほ協会本部の所在地ウィーンには一八九二年（明治十五年）ごろ、協会の前庭に、きわめて特異な記念碑が建てられましたが、その後こわれてしまったということです。

このように三基の記念碑が、造園関係者の団体の発起で建てられたという事実は、記憶しておきたいとおもいます。人気というものはなかなか分析してつかみにくいもので、おおむね徒労におわるものであります。シーボルトの場合も

いろいろ複雑な因子がからんでいるでありましょうが、第一には人柄がありましょう。そのうえ、シーボルトの業績を通じてでなければ、現在のわれわれが知りたくても知ることのできない、むかしの日本のすがたが無数にひそんでいるということがありましょう。日本の過去の記録文献で、これほどわかりよく日本が書けているものはないのではありますまいか？　その意味では、シーボルトの恩恵をこうむっているのは、外国人ばかりでなく、むしろわれわれ日本人がいちばん大きいのではありますまいか？

それでは、日本人はシーボルトから一方的に恩恵をうけただけであろうか？　現在多くの日本人は、シーボルトはえらい先生で、むずかしい病気をたちどころになおす名医であり、そういうすぐれた医術を門人に教えた人だとおもっていられるようでありますが、事実はそう単純ではありません。シーボルトの門人たちもまた、先生であるシーボルトに、実にいろいろなことで力をかしているのであります。

今日は、そういうところに焦点をあわせて、シーボルトと門人とのかかわりあいについておはなししたいとおもいます。

二、シーボルトまでの時代

シーボルトはドイツうまれのドイツ人であります。そのドイツ人が、オランダ人しかはいれないはずの鎖国時代の日本にはいれたのは、どういう事情であったのか？　それは、シーボルトが出島のオランダ商館付の医師という肩書きを持っていたからであります。この資格なら、オランダ人以外でも日本にはいれたのです。この前例はすくなくはありません。そのなかで有名なのは、ドイツ人のケンペル（Engelbert Kaempfer）（一六五一―一七一六）とスエーデン人のチュンベリー（Carl Peter Thunberg）（一七四三―一八二八）でしょう。ケンペルは偉大な世界探険家として知られ、チュンベリーはリンネの後任としてウプサラ大学教授となった植物学者として知られています。そのふたりとも、大部の「日本の

歴史」（ケンペル、文献六）を刊行しています。そのほかケンペルには Amoenitatum Exoticarum（「廻国奇観」、異国の魅力というほどの意）の著作があり、チュンベリーには専門の「日本植物誌」があります（参照　文献七）。そのようなわけで、これらの不滅の著作におおわれて、ふたりがちゃんとした医師であったことを、多くの人は知らないようです。しかし、ふたりとも医師であったからこそ、その資格を利用して、出島オランダ商館付医師になり、オランダ人でないのに、日本にはいることができたわけです。このことからわかるように、この人たちは、自分の目的・使命を達する手段として商館付医師になったのであって、日本へ来てから、おもいたったというのではありません。

それでは、シーボルトの場合は、どのようなことで出島オランダ商館付医師になることができたか？

それを理解するには、そのころのオランダの国情を思いおこす必要があります。

一八〇〇年前後のころのオランダは悲運のどん底にありました。一七九五年フランス革命軍の侵入をうけて以来、オランダは主体性をうしない、フランスとイギリスの二大国の勢力あらそいにもてあそばれました。そしてフランスの勢力下にまずバタビア共和国（Bataafsche Republiek）ができ、ついで一八〇六年にはオランダ王国（Koninklijk Holland）となり、ナポレオン一世の弟ルイ・ナポレオンが国王となりました。しかしフランス領になったジャバの財源がなくなり、イギリス海軍の封鎖になやまされました。ところがやがてオランダ本国に政変が起り、ルイは一八一〇年退位し、ナポレオン一世のフランス帝国に併合されてしまいました。するとイギリスは一八一一年八月ジャバを占領し、一八一三年には日本までやってきて、オランダに商館の引渡しをせまりました。それをしりぞけた当時の商館長がヘンドリック・ヅーフ（Hendrik Doeff）（一七七七―一八三五）でした。一方オランダ本国では、一八一三年ナポレオン一世がライプチヒで敗れ、一七九五年以来イギリスに亡命していたオランエ公（Orange）が復帰して王位につき、ウイレム一世（Willem I）となりました。翌一八一四年四月ナポレオン一世は帝位を退き、エルバ島にながされ、一八一六年にはオランダはようやくふたたび独立し、植民地ジャバもオランダ領に復しました。

本国がこんなありさまでしたから、日本の長崎出島では、一八〇九年から一八一七年までの八年間、貿易のため入港したオランダ船は皆無という有様でした。この苦しい時期に、出島商館長ヅーフは一八〇三年から一八一七年まで、オランダ本国が実質上存在しない時期にも、よく出島をまもりとおし、世界でオランダ国旗がひるがえっていたのは、出島だけであったということです。

ヅーフの後任として一八一七年に商館長になったヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）は、シーボルトが日本へ来た一八二三年まで在任し、本国復興の気運にこたえて、つとめて日本の高位高官ともひろくまじわり、オランダ国の信用回復に力をつくしました。それといいますのは、ようやく独立をとりもどしたオランダは国力回復のため、とくに東洋貿易に力をそそぐこととなり、そのためには植民地の学芸の振興をはかる一方、その地の実情をくわしく調査し、その結果をもとにして、貿易の振興をはかろうとしていたからでした。もとより、長年修交の実績を持つ日本にたいしても同様でした。

シーボルトが登場するのは、ちょうどこういう時期でした。

三、シーボルトのおいたち

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトは一七九六年二月十七日ドイツ・バイエルンのウュルツブルグ（Würzburg）の町でうまれました。

シーボルト家は、稀に見る医学者一家でありまして、シーボルトの祖父はウュルツブルグ大学の解剖学・外科学・産科学の教授、のちベルリン大学へ招かれております。父はウュルツブルグ大学の生理学教授。二人の叔父はウュルツブルグ大学の外科学・産科学の教授と同大学の産科学教授。従弟二人もひとりはマールブルグ大学、のちゲッチンゲン大学の産科学教授、もうひとりは最後はミュンヘン大学の生理学・比較解剖学教授で、別に動物学・動物解剖学教室の主任も兼任

したそうです。

シーボルトは三歳のとき、まだ若い三十三歳の父（Johann Georg Christoph von Siebold）をうしないました。しかし、シーボルトはめぐまれた医学者的環境のなかでそだちました。シーボルトはゆたかな才能にめぐまれ、勤勉で、抜群の記憶力を持っていたそうです。

シーボルトは一八一五年ウュルツブルグ大学に入学し、医学を修めました。かたわら自然科学・地理学・民族学にも関心を持ち、勉強したそうです。シーボルトは在学中に一年半、死んだ父の友人で解剖学教授デリンガー（Ignaz Döllinger）（一七七〇―一八四一）のところに厄介になっていました。シーボルトはデリンガーに大学で学んだほか、デリンガーの宅でも多くの博物学者ともしたしくなりました。このことがシーボルトの博物学への愛好をかりたて、ぜひヨーロッパのそとへいきたいとおもうようになりました。シーボルトへのデリンガーの影響がどんなに大きかったかは、シーボルトが日本へ来たとき、デリンガーの頭髪を膚身はなさず持っていたことからでもわかります。この頭髪は今日まだ保存されています。

一八二〇年シーボルトは二十四歳で大学を卒業し、Doctor Medicinae, Chirurgiae et Artis Obstetricae（内科学・外科学・産科学のドクトル）の学位をもらいました。

シーボルトは卒業してから一年ばかり、ウュルツブルグの近くのハイディングスフェルト（Heidingsfeld）という小さい町で開業しましたが、かねて念願の東洋行の志がいよいよつのってきました。

四、シーボルト日本へ

シーボルトはバイエルン王の許可を得て、オランダ政府のよびかけに応じて、一八二二年ハーグへいき、父のかつての教え子で、オランダ国王ウィレム一世の侍医になっているハールバウエル（Haarbauer）のとりなしで、植民地相ファル

ク（Anton Reinhard Falck）（一七七一―一八四三）の特別のはからいにより、蘭領東インド陸軍の外科軍医少佐（Chirurgicus Major）に任ぜられ、同時に植民地において博物学的研究をすることを委托されました。それは一八二二年七月のことで、シーボルトは二十六歳でした。これで、ドイツ人であるシーボルトが、オランダ人しか出入できない鎖国日本にはいる最初の関所のとびらがひらかれたわけです。

シーボルトは、任命されると、時をうつさずパリ・フランクフルト・ボンをおとずれ、各地の高名な学者に面接し、自分のこれからの調査研究の目標について忠告を受けたあと、一八二二年九月二十三日にロッテルダムを出帆、喜望峰をまわって、あくる一八二三年四月にようやくバタビアにつきました。すると四月十八日には蘭領東インド総督バロン・ファン・デル・カペルレン（Baron van der Capellen）（在任一八一六―一八二六）の命により砲兵第五連隊付軍医に任ぜられました。それから一か月もたたぬうちに、シーボルトは出島オランダ商館付医師に転任となり、あたらしく出島商館長として赴任するド・スチュルレル（Johann Willem de Sturler）に随行することになりました。この任命と同時にシーボルトはあわせて日本の博物学的調査を命ぜられました。これでいよいよシーボルトの日本行は実現することになりました。すなわちシーボルトは五月二十五日に新商館長にしたがって、バタビアから出帆し、約二か月半かかって、八月十一日に出島に上陸しました。

このように、シーボルトの希望はトントン拍子にかなえられましたが、これは偶然の連続とはおもわれません。わたくしは商館付医師の人選任命がどのような手順でおこなわれるのか知りませんが、ケンペルやチュンベリーの場合を見ましても、この外国人たちが日本行を志望し、オランダ政府もこの人たちを見込んで、計画的に採用し、日本へいけるようにとりはからったのでしょう。シーボルトの場合も基本的にはおなじであったとおもいます。

シーボルトは、出島へついて半年ばかりたったころ、自分は、植民地相ファルク閣下の特別のはからいで、有利な知遇を得て東インド植民地へ渡ることができ、オランダ人にのみ出入を許されている国日本に行く好機にめぐまれたという意

味のことを本国へ書いています。ファルク植民地相のはからいに応じてファン・デル・カペルレン総督の任命もおこなわれたのであろうと推測します。

シーボルトは日本誌初版のとびらのページにつぎのような文字をつらねて、ファン・デル・カペルレンに感謝し、この著書を捧げています。

Sa. Excellenz/dem hochwohlgebornen/Herrn/G. A. G. P. Baron van der Capellen/Grosskreuz des Orden des niederländischen Löwen,/Königlich niederländischem Minister,/Ersten Curator der Universität zu Utrecht, &, &, &,/Vormaligem General Gouverneur/der niederlandisch-indischen Besitzungen, /Auf dessen Befehl Ich die Reise nach Japan unternommen habe, /und nach dessen Anordnungen die wissenschaftlichen Untersuchungen/daselbst angestellt wurden :/dem/Hohen Vorsteher and thätigen Beförderer/der Kunste und Wissenschaften/ehrerbietigst/gewidmet.

すなわち自分がファン・デル・カペルレンの命令によって日本への旅を実行し、また同氏のはからいによって日本の科学的研究をおこなったことを述べ、芸術と科学の崇高なる先駆者であり、実行力ある推進者とほめたたえています。一八三二年ごろにはファン・デル・カペルレンはオランダ本国の大臣になっていたようです。

オランダ政府のこのような処置を、シーボルトの個人的な希望をかなえてやるためのものと考えてはなりません。なぜなら、当時のオランダ政府の海外政策の実現にうってつけの人間があらわれたのですから、オランダ政府もシーボルトを十分に活用する考えがあったからです。このことは、シーボルトが日本に住むようになってからのオランダ政府の積極的な支援の事実からよくわかります。この支援は、シーボルトがジャバから日本へいくときからはじまっています。現にバタビア総督府はシーボルトの日本行が公表された直後、シーボルトが日本で必要とする品物を陸軍倉庫の貯蔵品のなかから出して提供したうえ、支度金を公式に与えております。シーボルトはまた別に、日本人、ことに蘭学者がよろこび、お

どろくような科学機械や書物などを買いこみました。大きいものとしては、電気機具や発電機、空気ポンプなどがあります。これらは日本で蘭学書生を教えるための教材・教具というのでなく、日本の学者たちの心を収攬するためのものもあるようです。わたくしは、シーボルトのこのような、こまかな気のくばりかたに、かれの才智を見るおもいがします。

なにからなにまで十分に用意して出かけたシーボルトでしたが、ジャカルタからながい月日をついやして、いよいよあすは出島上陸という前日の八月十日、シーボルトの身辺に小事件がおこりました(文献八)。

八月十日正午ちかく、入国手続のため、日本の役人が通詞二三人をつれて、長崎の湾内に停泊しているシーボルトの船にのりこんできました。シーボルトによると、この通詞たちは、シーボルトより流暢なオランダ語をしゃべったそうです。ところで、通詞たちはシーボルトとはなしているうちに、シーボルトのおぼつかないオランダ語をききとがめたとみえまして、シーボルトの祖国に関して「いくつかの、憂慮すべき質問」(einige bedenkliche Fragen mein Vaterland betreffend)をしたらしいのです。シーボルトは、この質問にすくなからずまごつきました。というのは、何年かまえにベルギー人の商館付医師のことばが日本人に通じないため、日本政府は命令を出して出島の商館から追放させたという実例があり、チュンベリーもはじめのうちはオランダ語のことでたいへん困難をひきおこしたということも周知であったからです。

シーボルトは頓智をはたらかせて、通詞にこう説明したそうです。御承知のようにドイツ人のことを Hochdeutscher (高地ドイツ人)、オランダ人のことを Niederdeutscher (低地ドイツ人)といいます。シーボルトはこれにひっかけて、Hochdeutscher はとりもなおさず「山オランダ人」(Jamahollanda すなわち Bergholländer)である。つまり自分はオランダのうちでも山オランダ出身のものだとこじつけて、通詞をやっと納得させることができたというのです。こうしてシーボルトにとっての安宅関を無事通過し、あくる八月十一日にようやく出島の土をふむことができました。

この小事件は、来日当時のシーボルトのオランダ語がかなりまずしいものであったことを物語っているとおもいます。

オランダ語はドイツ語とおなじ語系の国語ですから、書いたものを理解することは比較的やさしいでしょうが、発音はかなりちがっていますから、口でしゃべる会話は、自国語の発音がかえってさまたげになるかもしれません。シーボルトの場合のも例外ではなかったようです。

五、シーボルトの活動とそれをたすけた人々

一八二三年八月十一日、念願の日本の土をふんだシーボルトは、それから五年の任期のあいだ、おどろくべき精力で活動しました。そして一八二八年（文政十一年）八月（日本暦）いよいよ帰国する準備もすっかりできていたところへ、八月十日の暴風の長崎襲来です。これがきっかけで、いわゆるシーボルト事件がおこり、一年あまりごたごたであけくれ、あくる一八二九年九月二十五日（日本暦）には日本御構（おかまえ）（追放）となり、十二月五日（十二月三十日）ようやく長崎をはなれることができました。

この最後の一年あまりのことにはたちいらない事件にして、シーボルトの正規の五年間の任期中の活動だけを見てまいりたいとおもいます。

シーボルトの日本での活動を見るとき、シーボルトに与えられた二つの任務、すなわち出島オランダ商館付医師としての任務と、日本の博物学的・民族学的研究調査という任務とをあわせて考える必要があります。

シーボルトは、出島オランダ商館付医師としての本務は忠実につとめたとおもわれます。もともと商館付医師としての任務は、出島に駐在している十数人の人々の病気を治療したり、健康を管理したりすることです。そのほか、たまたま商館長が江戸参府、すなわち将軍にあいさつにいく年にあたれば、商館長について江戸へいきます。そして江戸滞在中は本石町の長崎屋で、江戸の学問ずきの蘭学者や蘭方医などの質問をうけて、その質問にこたえるくらいがせいぜいでした。その様子は、大槻玄沢の記録「西賓対晤」（文献九）を見るとわかります。

シーボルトの活動は、そのような消極的なものではありませんでした。長崎での活動範囲は時とともにひろがり、まず出島のそとに出て、長崎の町内（出島の近く）で、吉雄幸載、楢林栄建、楢林宗建というような、もとオランダ通詞の家であって、のちに医を業とするにいたった人たちの家に出張して、日本人の医療をおこない、医学生にも医療の実際を教えました。一方出島へ日本の医学生を入れて、シーボルトの住宅で医学を教えることもゆるされました。こうして、シーボルトにほんとうの意味での門人ができたわけです。

翌年の四月には、シーボルトの活動範囲はさらに発展して、鳴滝に別荘を買いもとめ、ここを自分の塾としました。医学生はここへ来て、シーボルトの患者治療の実際を見学し、また教えてもらいました。このような鳴滝塾での活動のようなことは、シーボルト以前に日本へ来た外国人の誰にも許されなかったものでありまして、歴史的に見て、まことに異例で破格のことです。

シーボルトの、もう一つの任務である、日本の博物学的・民族学的研究の活動は、その本務よりはなばなしく、まことに目を見はらせるものがあります。実際にはシーボルトはこちらのほうにはるかに多くの精力をつぎこんでいます。オランダ本国へ提出した署名の肩書に、「日本における博物学的調査研究の任務を負う外科軍医少佐」という意味の文字をしるしていることからもうかがえるように、二つの任務とも十分に認識しての活動です。

シーボルトは直接に日本の自然・人・社会・事物を観察するかたわら、あらゆる手段をつくして、これらに関係ある情報・文献・記録をあつめました。そのうえ、日本のありとあらゆる品物を収集しました。持ちはこべるほどのものは、ほとんどすべて収集しました。その種類は、動物・植物・鉱物というような天産物のほか、人間の生活につかう道具のあれこれ、下駄・ゾウリ・ワラジの類にまでおよんでいます、書籍・手書き本・絵画などはいうまでもありません。まあよくこれだけあつめたものだとおもいます。その数はかぞえきれないといわれています。

シーボルトは、出島の一部にかなりひろい植物園をつくりました。蘭領東インド総督は、一八二四年二月には、この植

物園のための追加予算を認めています。その後鳴滝の塾ができたとき、そこにも植物園をつくりました。シーボルトの採集した植物はすべてオランダ政府の所有とすることになっており、毎年珍らしい植物をバタビア政府に送り、本国へはバタビア政府を経て送ることになっていました。バタビアでは、有名なバイテンゾルフ植物園（Buitenzorg）にシーボルトの送った植物を栽培しました。「日本誌」の第二版によりますと（文献五）、シーボルトが送った生きた植物は約五百種で八百本におよび、一部は自分が帰国したときに持ちかえったそうです。腊葉は二千点におよぶといいます。注目すべきことは、シーボルトは日本の茶の種子をバイテンゾルフ植物園におくったことです。種子は発芽生育し、のち植民地にひろがり、あとでは茶はオランダ植民地の大きな財源になったそうです。一八二七年には、シーボルトが送ってきた種子はすでに二千ないし三千本の若木にそだっていたという記録があります。

出島の植物園には千四百種の植物があったそうですが、シーボルトが去ってからは廃園になってしまいました。

動物の収集もこれにおとらずさかんなもので、シーボルトの在任中に、脊椎動物三十五種（一八七標本）、鳥類一八八種（八二七羽）、爬虫類二八種（一六六）、魚類二三〇種（五四〇）、その他、甲殻類、昆虫類など多数を送ったということです。

このほかの収集品をどうやってはこんだのか。いずれ船によったのでしょうが、現在それらは、シーボルト自身の記録、協力者の記録とともに、ヨーロッパの数カ所に散在して保管されています。品物はライデンの国立博物・民族学博物館（Rijksmuseum voor Natur- en Volkenkunde）の所蔵になっておりますし、持ちかえった植物の種子や生木はライデン大学の中庭でいまもよくそだっております。また文書類はライデン大学図書館やハーグの国立文書館（Allgemeene Rijksarchief）、またバタビアの文書館（Landsarchief）にも保管されています。このほかに、シーボルトとその協力者たちの著作の資料、記録、文献、原稿類数百点が戦前ベルリンの日本学会（Japan-Institut）に保管されておりました。それは Sieboldiana（シーボルト文書）としてまとめてありました。あとでおはなしいたしますが、このシーボルト文書

が昭和九年から十年（一九三四―一九三五）にかけて日本に貸与され、一般の展覧と研究に供せられました。

これらは大部分フォトスタットでコピーをつくり、研究をすませたあと、一括して東洋文庫に寄贈されました。いまも東洋文庫にあります。

ところで、この貴重な文献は、第二次世界大戦の結果としてベルリンが東西に分割されたときに東西に分割され、アメリカとソ連とが半分ずつ接収して、本国で保管されました。その後いつのことか知りませんが、アメリカが接収していたものは西ベルリンに返還され、ソ連接収の分は東ベルリンに返還されたということです。しかしまだもとどうり一か所にまとまるまでにはいたっていないそうです。この接収・運搬・保管・返還のあいだに紛失した資料があるかも知れません。不幸にしてそういうことがあれば、東洋文庫のフォトスタット・コピーが現存唯一の資料ということになります。注意して比較調査してほしいものです。

さて、シーボルトの博物学的・民族学的研究調査の成果はたくさんありますが、出版物にまとまった代表的なものは、"NIPPON"（日本誌）（一八三二―一八五四）、"Fauna Japonica"（日本動物誌）（一八三三―一八五〇）、"Flora Japonica"（日本植物誌）（一八三五―一八七〇）で、これがわたくしのいう三部作であります。このほかアイヌやアイヌ語の研究や日本地図の作製などがありますが、一般の興味からいえば、やはりうえの三部作にとどめをさしましょう。いずれも帰国後数年以内に、分冊として逐次刊行をはじめていますが、完成までに、動物誌は十七年、日本誌は二十二年、植物誌は三十五年という長い年月かかっています。植物誌などはシーボルトの死後に完成したのです。そのなかで日本動物誌と日本植物誌は純粋の学術書で、いずれもその分野の専門学者との共著になっています。すなわち、日本動物誌にはテンミンク（C. J. Temminck）、シュレーゲル（H. Schlegel）、ド・ハーン（H. de Haan）が分担し、日本植物誌にはツッカリーニ（J. G. Zuccarini）が加わっています。それにしても、シーボルト自身に動物学や植物学、ことにその分類学的基礎知識がなければ、日本において選択採集することも、記載することもできないでしょう。また採集された動物や植物の生態を忠

実に写生できるフィレヌーフェ（ヴィユヌーヴ）(Carl Hubert de Villeneuve)や川原慶賀というような、稀に見る有能な写実画家にめぐまれなかったら、なにもかも成就しなかったでしょう。なお日本の植物については、さきにチュンベリーの本格的な学術的著作、Flora Japonica(日本植物誌)、Icones Plantarum Japonicarum（日本植物図譜）その他があり、動物の記載もたくさん断片的に発表されています。さきにはケンペルの日本誌にも植物の記載のくわしいのがありますが、これはシーボルトの比ではありません。

この二つの専門書にたいして、「日本誌」は、シーボルトの多方面な才能を存分に発揮した著作であると同時に、この著作ほど多くの日本人の援助をうけた著作はありません。そのうちシーボルトの門人の援助については、あとでくわしくおはなしいたしますが、大体を申しますと、シーボルトが知りたいとおもうことがらを門人たちに課題として与え、その報告（回答）をオランダ語で書いて提出させ、それをさまざまなかたちで利用し、あるいはそれをもとにして、シーボルトたちが直接に原資料についてしらべ、あるいは実地に当ってまとめたのです。もっともその仕事はシーボルト自身ひとりでやったものばかりとはかぎりません。シーボルトのジャバ総督への申請に応じて日本にきたドイツ人ビュルヘル（ビュルゲル）(Heinrich Bürger)（文献一二、一三）は、シーボルトよりは約十歳下でバタビアの病院に薬剤師として勤務しておりましたが、物理・化学・鉱物学にくわしく、この人の助力を得た部分がすくなくありません。画家のフィレヌーフェが日本に来たのは、この人といっしょでした。ブュルヘルはシーボルトが帰国したのちも、一八三五年ごろまで出島で勤務していました。またシーボルトがオランダに帰ってからは、ホフマン（Johann J. Hoffmann）の助力を得たことは絶大でした。ホフマンはのちにオランダの日本学（Japanologie）の創始者になった学者です。この人の筆で書かれた原稿がかなりたくさんのこっていまして、この人たちが「日本誌」のどの部分を分担し、協力したか、その過程までがよくわかります。また漢字の読める清国人郭成章の役割も重要であったはずです。その筆蹟が随所に見られます。

六、シーボルトの活動をささえた人々

それでは、シーボルトはなぜ、このように、出島オランダ商館付医師としては異例、破格の活動ができたか？　また日本の博物学的・民族学的調査研究という仕事も、全く驚異的な成果をあげることができたか？　もとより、シーボルトのひとなみはずれた才能と情熱もさることながら、これには、シーボルトの活動を直接間接にささえた、つぎのような力が決定的に大きかったとおもいます。

その第一は、オランダ政府の積極的な対外政策にもとずく積極的な支援であります。このことはうえに述べましたが、本国政府の方針にそって蘭領東インド総督ファン・デル・カペルレンは出島商館長ド・スチュルレルを通じて、シーボルトが長崎の町の内外の病人のために往診することや、近郊で薬草その他を採集することを、長崎奉行をへて幕府に申し入れさせ、許可を得ました。これ自身が異例のことです。

これよりさき前任商館長のブロムホフは、つとめて日本人と親しくまじわり、これとおもう日本人を知るまでになっていました。ですから、シーボルトが出島へついたとき、ブロムホフは、早速湊長安、美馬順三、平井海蔵、岡研介というようなすぐれた医学生をシーボルトにひきあわせています。これなども、シーボルトにとってはありがたい支援であります。

もうひとつ、オランダ政府のシーボルト支援の実例として、シーボルトが日本へ来た翌年一八二四年十二月二十六日付で出島商館長がバタビア総督の名において長崎奉行高橋越前守にあてた公文書（蘭文）の主要な部分を御紹介したいとおもいます、大意を現在風の表現で書きます。

（略）近年オランダ本国では学術が大いに進歩し、以前にオランダ人が教えたことがまちがっていたということもすくなくないこととおもわれます。総督が昨年ドクトル・フォン・シーボルトを派遣しましたのは、この誤を是正するためでありますが、そればかりでなく、医学・博物学を学びたい人々に教授し、またこの蘭医（Hollandsch Doktor）の治療を受けたい人に個人的に奉仕させるためでもあります。ドクトル・フォン・シーボルトはオランダにおいて高名な医師（vermaarde Doctor in Holland）で、内科・外

科・眼科・婦人科・薬草・博物・地理の諸学に精通しています。ですから私は昨年ドクトル・シーボルトが患者を診療のため、また薬草を採集のため、時々長崎町内に（出島から）出ることの許可をお願いした次第です。同人はすでに約一年間御地にあって内科・外科の診療に当たり時には絶望の患者も救っております。したがって日本の事情も十分理解しており、長崎の人と他国（他藩）の人とを問わず治療して十分経験を積んでいます。もし将軍か大名の侍医にして同人から医術の伝授を受けたい人があるならば、日本政府（幕府）の経費を用いることなくして同人を何年か滞留させるようにいたします。（略）

まことにゆきとどいた申出であります。しかしこのなかでシーボルトを「蘭医」と書いていることと、「オランダにおいて高名な医師」と書いていることは見のがせません。シーボルトがオランダ人医師でないことは、バタビア総督も出島商館長も承知のはずですし、オランダに住んだこともない若いシーボルトが、ドイツの大学卒業わずか二年後の二十七歳で遠く東洋に去り、日本で二十八歳をむかえながら、すでにオランダで「高名な医師」といわれるということは全く考えられません。わたくしは、この文書を、度をすぎた政治的・外交的発言と解します。わたくしはむしろオランダ政府関係者のシーボルト支援の善意のあらわれと解したくおもいます。

第二に、オランダ政府のこのような積極的なよびかけに呼応して、長崎奉行高橋越前守、ついで土方出雲守が蘭学書生に特別の庇護を与え、またシーボルトには上述のような自由を与えたことです。当時の日本の政治下では、このように、両国の意気のあった了解がなければ、いくらシーボルトでも、なにもできなかったはずです。

第三に、長崎の和蘭通詞たちの大きな援助をあげたいとおもいます。当時は学識・識見ある和蘭通詞がいまして、通訳の仕事ばかりでなく、その仕事を通じて、シーボルトの博物学的・民族学的調査研究をカゲになりヒナタになってたすけました。吉雄権之助、吉雄忠次郎、茂土岐次郎、中山作三郎、茂伝之進などは、みな通詞以上の通詞であったといってよいとおもいます。茂伝之進はシーボルトの植物採集の案内などを積極的にやったようです。

第四に、順序として、どうしてもシーボルトの仕事の協力者・助手たちの寄与をあげておかねばなりません。この人たちについてはこれまでにくわしくおはなしいたしましたから、くりかえしません。

第五に、そして最後にあげたいのは、シーボルトの日本人の門人たちの協力援助であります。門人といえば、普通は先生の教えを一方的にうけるものと考えがちです。実際医学・医術に関するかぎり、多くの医学書生は、シーボルトから、患者をまえにして医術の実際を学びました。講義もきいたようです。若くて経験のあさい門人たちは、シーボルト先生を名医とうやまいました。ことに眼科の手術（白内障）は多くの患者を盲からすくいましたので、大いに感謝されました。しかし、医科大学を出てわずか二・三年では臨床経験が不足で、「名医」といわれるにはほどとおいものと考えます。シーボルトの二人の息子が NIPPON の第二版のはじめにかかげたシーボルト伝では、ドイツ語で Wunderdoktor ともてはやされたと書いています。

ところでわたくしがここで指摘いたしたいのは、シーボルトの門人のうちすぐれた人たちは、シーボルトから教えを受けるだけでなく、シーボルトの仕事に大いに協力し、献身的に援助した点です。このことを、とくにとりあげてつぎの章でおはなししたいとおもいます。

七、門人はシーボルトの仕事をどのようにたすけたか？

門人はシーボルトの仕事をどのようにたすけたか？

これは、五十年前のシーボルト来日百年記念会があったころ（大正十二年、一九二三年）には、まだよくにわかっていなかったことです。

戦前のことになりますが、シーボルトの門人たちがオランダ語で書いてシーボルトに提供した報告のような冊子がかなりたくさんベルリンの Japan-Institut にあることは、目録その他でわかっておりました。呉秀三先生もすこしこの資料に触れた発表をしていられますし、わたくしも多少研究して発表したことがあります。しかしもとよりその全容はわかりませんでした。

ところが、昭和九年（一九三四）になって、Japan-Institut の会長である前駐日大使ゾルフ（Solf）氏のはからいで、三百点をこえる Sieboldiana（シーボルト文書）が日独文化協会に貸与され、翌十年（一九三五）の四月に「シーボルト資料展覧会」が開かれました。このことは、このおはなしの最初の部分で表にしてかかげてあります。展覧会のあと、多くの研究者が自分の分野のものについて、手分けして研究することになりました。わたくしたちは、大鳥蘭三郎・大久保利謙・箭内健次の四人で、この門人たちがオランダ語で書いてシーボルトに提供した資料を研究いたしました。入沢達吉先生の御指示で、わたくしがまとめ役をつとめました。このときの各研究は「シーボルト研究」（文献二）に掲載されました。われわれのは「門人がシーボルトに提供したる蘭語論文の研究」と題し、二一〇ページにあまる、非常にくわしいものです。この研究によって、門人たちが先生に提出したオランダ語報告の正体がはじめてあきらかになりましたし、さらに、シーボルトがどのように門人たちを利用したかもよくわかりました。そのことは、ひいてはシーボルトの「日本誌」の製作過程の究明にも役立つことになりました。

これからしばらく、この門人の仕事についておはなしいたします。演題の「シーボルトと門人」といいますのは、実はここのことをおはなしするつもりでつけたのです。

まず、これらの門人のオランダ語文がどのようにしてシーボルトの手にはいったか、このことからおはなしする必要があります。

シーボルトは一八二六年、スチュルレル商館長に随行して、江戸におもむき、将軍に謁見しました。商館長のこの目的の江戸への旅行を「江戸参府」とよんでいます。このときのシーボルトの旅日記も「江戸参府紀行」とよんでいますが、これはシーボルトが商館長の資格で江戸へいったような誤解をまねきます。しかしこういういいかたをしますから、そのことを承知で、つかうことにいたします。一八二六年のシーボルトの江戸参府紀行は「日本誌」の特長ある部分を形成しています。原文は "Reise nach dem Hofe des Syogun im Jahre 1826"（一八二六年将軍廷への旅行）という題で、略

して Hofreise と申します。オランダ語では Hofrijs です。

ここでちょっとシーボルトの門人たちについて触れておきたいとおもいます。当時の塾にはたいてい入門帳があって、入門のときに自分の名を書き入れるのが普通ですが、入門したものが、かならず書いているとかぎりません。一方、正式に入門していなくて、一二度面接して教を受けたとか、文通によって教示を受けたような人まで、門人と自称している場合もあります。また有名な学者の塾がありますと、全く関係のない人でも、入塾したにちがいないとおもいこんで伝記や碑文に書くことがすくなくありません。シーボルトの場合もおなじです。門人帳がありませんから、ほかの記録に証拠を求めて門人であったかどうかを推定しなければなりません。呉先生はこうして「門下として直接教を受けし人々」として五十三名、「初度渡来の時交際又面会せし人々」として二十五名をあげていられます。ただしその顔ぶれはその後の調査で多少の変動がありますが、つぎの人たちは門人中でもおもな人々でしょう。

御参考に、かれらとシーボルトとの年令の差をかかげておきます。シーボルトと門人たちとの年令がいかに接近していたかがわかります。

湊長安(不明)、岡研介(三歳下)、美馬順三(一歳上)、二宮敬作(八歳下)、高良斎(三歳下)、高野長英(八歳下)、戸塚静海(三歳下)、伊東玄朴(四歳下)、大石良英、大庭雪斎、黒川良安、石井宗謙(同年)、日野鼎哉(一歳下)、伊藤圭介(七歳下)、児玉順蔵(十歳下)、平井海蔵、鈴木周一、杉山宗立

このほか江戸や京都でシーボルトがあった学者がすくなくありませんが、シーボルトの門人についておはなしする今日、そちらの方へは深入りいたしません。

さて、一八二六年(文政九年)、シーボルトは、日本へ来てから三年目に、スチュルレル商館長の江戸参府について商館付医師として江戸を往復する機会にめぐまれました。シーボルトは細心の準備をしました。旅の途中で面接する門人や、友人や、世話になる人や、重要な地位にある人などへの手みやげ、贈物をこまごまととととのえました。また江戸であう幕

府の役人や、蘭学者その他の学者たちのだれかれに贈る品々はいうまでもありません。

このほか、それまでにシーボルトのもとを去って故郷へ帰る門人に課題を与え、その回答(報告)をオランダ語で書かせて、この旅の途中でうけとる約束をしています。この書きものをシーボルトは、ドイツの大学の制度にまねて Dissertatio inauguralis (卒業論文) とよんでいます。門人がこれを提出すると、シーボルトは Doctor-Diplom (ドクトル免状) を授与するという仕組です。しかし、シーボルトがドクトルの称号を授ける権限があるはずがありません。ドクトルの称号授与の制度は、大学のような教育機関に定められているもので、個人の一存で授与できるものではありません。もとよりシーボルトはこのことは十分承知していて、ただそのようなかたちをとってみせたのでしょう。実際シーボルトの与えた免状には、あとでお目にかけますように、ドクトルの称号を与えるとは書いてありません。そればかりではありません。シーボルトは、この免状をさきにわたしてしまって、それとの交換条件として課題の報告の提出を確約させています。これでは Dissertatio inauguralis という名目もなにもあったものでありません。

わたくしには、シーボルトがみずから日記にこういう語をつかった気持がわかりません。正式の意味でのドクトル免状は論外として、医学課程が全く組織立っていない当時のシーボルトの塾で、どれだけ履修すれば、修了といえるのか、そして卒業論文を書く資格ができるのか、だいいちそれが全くいいかげんです。正式の Dissertatio inauguralis は、本人が履修した学科、すなわちいまの場合医学にかかわるものでなければならないのが当然です。ところがシーボルトが与えた、いわゆる Dissertatio の課題は、大部分が医学となんの関係もないものですし、そのオランダ語で書かれた内容も、単に日本の文献の翻訳であったり、自主的なものであっても、きわめて幼稚なものであったりして、なにひとつ、その名にふさわしいものはありません。

しかし事実、シーボルトのいう Dissertatio inauguralis は、門人がシーボルト先生のオランダ語での免状(実は証明書)としてたいそうよろこびますので、その心理を利用して、シーボルトの欲する情報を収集する手段にしたことがあき

らかです。このほかにシーボルトが、このような卒業論文というような名目でなく、オランダ語の書ける門人に、いろんな問題について書いて出してほしいと直接にたのんでいる記録がのこっています。シーボルトの要請にこたえて報告を書いて提出した門人のおもな人は高野長英、高良斎、石井宗謙、美馬順三たちです。

このへんで、シーボルトの江戸参府紀行の記録から、具体的な記事を御紹介いたしましょう。

シーボルトは、この旅行に門人をいくたりか同伴しています。その筆頭が高良斎です。ほかに別の名目で二宮敬作、石井宗謙をつれていきました。良斎は植物の知識がとくに深いからで、ほかの門人たちも、自分の博物学的調査の手助けをしてもらうためでした。伊東玄朴もいっしょでした。

「紀行」の二月二十六日の記事に、つぎのような意味のことが書いてあります。下関滞在中のことです。

二月二十六日　長門・周防から門人や知人が、友人や患者をつれ、贈物や珍奇な天然物を持ってやってきた。門人中よくできた人たちと再会する約束であったのである。かれらはわたしのもとを去るにあたり、かれらが故郷で卒業論文（Dissertatio inauguralis）を書きあげて、わたしの江戸参府の旅の途中でわたしに手渡すという条件で、見事なドクトル免状（Doctor-Diplom）をすでにもらっているのである。その題目はわたしが指定したのであるが、いつも日本と隣国、保護国に関するもので、その地理学、民族学、博物学の分野にわたり、まだほとんど知られていないか、知る価値のあるものをえらんだ。

今日うけとった主なものはつぎのとおり。

河野コサキ(?)の「長門・周防国の地理的・統計的記述」（注　コサキは厚伯か?）
杉山宗立の「海塩の製法」
井本文恭の「普通に用いられる染料と布の色」
高野長英「鯨と捕鯨法」
「日本における注目すべき疾病」
「普通に用いられる薬品表」
その他

各論文についている人名は、提出者なのか執筆者なのかはっきりしないところがあります。たとえば後述のように、シ

ーボルト文書中にある「海塩の製法」はあきらかに戸塚静海の筆蹟です。静海が杉山宗立のために訳したのでしょう。

三月一日は下関出発の日です。門人・知人が朝早くから別れのあいさつにやってきて、贈物（餞別）をくれます。シーボルトはかねて用意しておいた返礼の品々をわたします。シーボルトは、このようなことを書きしるしたあとで、例の論文と免状のことをつぎのように書いています。

前述の論文の著者にはめいめい特別の贈物を、壮重な態度で手渡した。また、このたび免状（Diplom）をもらった新しい志願者（候補者 Kandidaten）にはいくつかの課題を与えた。こういうしぐさは、つとめて品位と威厳をもってし、相手の肝に銘ずるような力強い口調で述べた。（略）

論文提出のまえに免状を与えることの無意味なことは、まえに論じましたから、くりかえしませんが、この日の記事を見ても、シーボルトの演出家としての一面がよくあらわれているとおもいます。

参府紀行とは関係ありませんが、もうすこしシーボルトの門人と報告と免状のことを、他の記録から御紹介いたしましょう。

それは、江戸参府からさらに三年たった一八二九年（文政十二年）の暮近く、すなわちシーボルト事件も一応かたずいて、シーボルトが国外追放のかたちで日本長崎を去る直前のことです。その十二月五日付で高良斎がシーボルトにオランダ語のてがみをとどけています。そのなかで、良斎は惜別の情をのべたのち、先生から依頼された論文は、かならず明年までに仕上げて、フィレヌーフェに送りますと書いています。その論文の題はつぎの三つです。

一、日本におけるあらゆる実用植物の栽培法
二、純日本医学について
三、日本各地の主要産物

実は、これはシーボルトの依頼状の返書でありまして、全文が呉先生の著書（文献一）のなかに「高家文書二」として

出ています。自分の出島滞在はあと十日か十一日しかないから、はやくたのむと書いています。また Getuigenis（証明書）を仕上げたことも書いています。てがみに日付はありませんが、この証明書の日付は十二月八日となってます（後述）。良斎は日本の暦で書き、シーボルトは西洋暦で書いたものかも知れません。

この例などは、シーボルトが知りたいことを、直接に質問し、回答を求めているもので、Dissertatio inauguralis すなわち卒業論文というような、「卒業」にかかわりのないものもたくさんあったことを示しています。裏をかえせば、シーボルトの手もとには、このような問題をとりあつかった情報・資料が欠けていたことを物語っているわけです。

シーボルトの帰国まぎわにこのような依頼をうけたのは、良斎ばかりではありません。高野長英もせっぱつまった時期に訳して提出しています。その冊子がシーボルト文書にあります。戸塚静海も石井宗謙もそうです。石井宗謙はすこしまえ、十一月十六日付で、昨夜大いそぎで昆虫に関する論文を翻訳したことを告げ、御希望があれば、明年までにとどくよう秘密に翻訳しましようと書いています。そこにシーボルト事件の複雑微妙なかげりがうかがえます。戸塚静海の十二月五日付の最後のオランダ語のてがみは、このかげりをはっきりと伝えています。すなわち自分が先生依頼の本草に関する論文を書かなかったことをあやまり、この大部の本が突然公表されると、かならず憂慮すべき事態がおこることを察していただきたい、今は危険だから、やりすごして、明年はフィレヌーフェ氏を通じて、かならず先生にお送りすると書いています。

興味あることは、これらのすぐれた門人たちは、シーボルトのもとをはなれなかった関係か、例の問題の免状をもらっていなかったのです。良斎はシーボルトの帰国前にぜひいただきたい、ながく家宝にいたしますとたのみ、十月三十日付の免状をもらいました。もう一つもらっています。その内容はふたつともあとにかかげます。良斎はまた十二月五日付の最後のてがみで、免状を二宮敬作、戸塚静海、石井宗謙、鈴木周一等に与えていただきたいとたのんでいます。良斎は門人の組長のような地位にありましたから、みんなのために、このようにたのんだのでしょう。この人たちは、シーボルト

が日本にいるあいだにもらわなかったと見えます。静海自身も、さきのてがみで、免状を二通送っていただきたいと書いています。良斎のいうこととつじつまがあっています。

この帰国直前のシーボルトと門人との関係を想像すると、わたくしは、なにか悲壮なものを感じるのであります。そのなかでシーボルトの日本に関する情報の収集の執念には、ほとほと感服させられます。

御参考のため、問題の免状を三通お目にかけます。

その一、岡泰安に　一八二七年三月二日付

証　状

敬愛する周防国医師岡泰安氏は数年ヨーロッパの内科・外を勤勉に学び余の長崎における手術を陪観したことを認めここに証状を授与する

出島一八二七年三月二日

ジャバ　バタビア帝国海軍外科少佐　ドクトル　Ph. Fr.　フォン・シーボルト

その二、高良斎に　一八二九年十月三十日（高良斎自訳）

許　状

一　阿波一医高良斎子西遊シテヨリ茲ニ七年和蘭学ニ潜心精力スルコト称誉スルニ堪タリ就中内科外科本草学ニ精シ且ツ実事ニ接シテ予ノ説ニ従ヒ重病ヲ療スルコト許多并ニ外科眼科ノ手術モ自ラ施シ良効アルコト少カラス実ニ有徳碩学ノ士ニシテ日本人ニハ勿論和蘭ノ徒ニ対シ内外両科本草兼達ノ先生ト弘ニ唱フトモ羞スルコトナシ依テ証書シテソノ実ヲ告ク

紀元千八百二十八年十月三十日

ドル・ホン・シイボルト　印

於出島館記

その三、高良斎に　一八二九年十二月八日付（大意）

証　状

高良斎君は、多年余のもとにあって精励し、蘭語に精通し、内科・外科・博物学に関する書籍を日本語に翻訳したほか、和蘭の科

学に関心を持ち、祖国に大なる貢献をした。余は将来とも同人の国益になるような書籍を送ることを約束する

一八二九年十二月八日　ドクトル・フォン・シーボルト

ここにかかげたような内容のものをすべてシーボルト自身 Doctor-Diplom と称したかどうかわかりませんが、日本人さん「免状」とよんでいるものの内容は、大体前二者のようなものです。「その三」については、シーボルト自身も、上述のてがみに Getuigenis（証明書）と書いています。「その二」に高良斎自身が「許状」と訳しているのは当っておりません。

八、シーボルトは門人の提出した蘭文資料をどのように利用したか？

それでは、シーボルトの門人たちが提出した蘭文資料というのはどんなものであったのか、それをシーボルトはどのように利用したか？　それをつぶさに語ってくれるのが、Japan-Institut の Sieboldiana（シーボルト文書）中の四十数編の、日本人（大部分シーボルトの門人）が書いた蘭語資料です。これについてはさきにちょっとおはなしいたしましたが、ここで具体的に御紹介いたします。この研究は、三十数年前に緒方・大島・大久保・箭内の連名で発表（文献二）したものですが、もう一度ここでくりかえさせていただきます。この研究は、その道では常識として認められるようになりましたが、一般にはまだまだ十分に徹底しているとは申せません。

シーボルト文書におさまっている資料は、大体各冊和綴とし、表紙に題箋をはり、それにたいていシーボルトが自筆で表題を書いています。表題は、門人がつけた題と多少ちがっています。右下隅に "E collectione Dr. de Siebold"（シーボルト収集文書の意）と書いたものもあります。これらの資料から筆者別に九点（別に書翰集）をえらんで、装幀から中味までかなり忠実に複製したものを「施福多先生聚影」（文献一〇）と題して、箱入で売り出されました。それをごらんになると、原物の様子がおわかりになるとおもいます。

以下九つの実例についておはなしいたします。これは「文献聚影」に選ばれたものばかりとはかぎりません。

実例一（複製あり、文献一〇）

高野長英訳「日本における茶樹の栽培と茶の製法」

表題（シーボルト筆）Aankweeking van den Theeheester en Bereiding van den Thee op Japan. door Takano Tsjoje

内題（長英）Van de obkweeking van den theeboom en van de toebereiding van de thee.

これの原典はまだ不明です。宇治の茶の木の栽培と茶の製法をのべたものです。シーボルトはこの訳文の内容を骨格とし、自分でも文献をしらべ、実際を見たりして、シーボルトの自筆でドイツ語で長編の第一次原稿を書きました。最後にDr. von Sieboldと署名しています。この原稿はのこっています（文献一一）。ほかに第二次、第三次原稿も現存していますが、このふたつは、ともにホフマンの筆になるものです（文献一一）。あとの完成はホフマンにゆだねたのでしょう。これは NIPPON（初版は第二巻の三―八ページ、第二版は第二巻一三四―一四三ページ）に“Anbau des Theestrauches und Zubereitung des Thees auf Japan”という題で活字になっています。もとよりシーボルトやホフマンが書いた部分が多いのですが、長英の蘭訳文の内容がそのままうかがえる部分もありますから、長英の訳文が果した役割がすくなくないことがわかります。長英の訳文には製茶のときにつかう「助炭（じょたん）」の図が入っていますが、NIPPONには、「助炭」をはじめほかの道具も、実物に即して線画で約一ページ大にまとめてあります。長英の図が参考になっているものと信ぜられます。製茶法の記載のあとに茶樹のくわしい記載があります。これは長英の訳文と関係ありません（参照　文献二）。

ちなみにケンペルの「日本誌」には、茶と茶の木について、ずいぶんくわしい記載があります。

実例二（複製あり、文献一〇）

伊藤圭介訳「勾玉記」

表題（シーボルト筆）Beschrijving der Magatama, de Schatten der oudsten Bewoner van Japan.

door Ito Keiske

内題（圭介）Beschrijving van de Magatama of Buigende Juweel. Door MD. Cr. I. Keiske MDCCC XXVIII

（勾玉すなわち曲った宝石の記述）

本文は木内石亭の「曲玉問答」によって訳したことはたしかですが、圭介の訳文は勾玉ばかりでなく、瓶におよんでいます。

これが NIPPON に全面的にとりいれられ、"Magatama, die Schätze der frueesten Bowohner der japanischen Inseln"（日本の島々の最古の住人の宝、勾玉）と題して一章をなしています。圭介の訳文に出ている図が全部とりいれられていることからもわかりますが、これは原典から採った可能性もないとはいえません。しかし、シーボルトが脚註に Beschrijving van de Magatama, of gebogene Juweel, door den Japaner I. K. 1828（勾玉、まがった宝石の記載、日本人 I. K. 著、一八二八）とかかげていますから、まちがいありません。ただし第二版にはこの脚註はありません（参照　文献二）。

さきの高野長英の「製茶法」といい、この「勾玉記」といい、「日本誌」のなかで独立の章としてとりあつかわれているのは注目に値します。

実例三（複製あり、文献一〇）

戸塚静海訳「製塩法」

表題（シーボルト筆）Van de bereiding van het Zeesout.

内題（静海筆）De manier van den Zoutbereiding

シーボルトの参府紀行の二月二十六日の記事に、シーボルトがうけとった門人の蘭語論文のなかに、杉山宗立の「海塩の製法」があったことは、さきに引用しました。その原文（ドイツ語）は Ueber die Seesalzbereitung von Sugiyama

Soriu となっています。ところが、原資料について筆蹟をしらべますと、あきらかに戸塚静海のものであります。ですから、これはおそらく杉山宗立が書いたものを戸塚静海が蘭訳したのであろうと考えられます。静海の訳文の冒頭に、ここにはわが家でおこなっている製塩法を述べるとあるところから見て、宗立と静海の関係はまちがいないとおもいます。この訳稿は日本誌中の一章にまではなりませんでした。しかし参府紀行の三月六日の、備前の日比の塩田を訪れた記事のなかに、塩田による製塩法はまことに注目すべきものであるとして、くわしく記載しています。その内容は、静海の訳稿を参考にしていることはあきらかです。ただし訳稿の挿図はとりいれてありません。こういう形式は、日記体にはめずらしいことですが、シーボルトの日記（紀行）は、あとで編集し、体裁をととのえていますから、このようなものになるわけです。すなわち、シーボルトが日比の塩田を訪れたあとで、出版用の紀行の原稿をつくったときに、補足したのでしょう（参照　文献二）。

実例四（複製あり、文献一〇）

戸塚静海、馬順三、石井宗謙分担訳「灸法略説ほか」

表題（シーボルト筆）

Korte Beschrijving der manier van Mok'sa Branden en Branden met gloeiende Nadeln（訳、灸法および烙針法の簡単な記載）

Van der Oorzaak der Kinderpokken en mazelen（訳、小児痘瘡および麻疹の原因について）

De Naaldsteekkunde der Japaner（訳、日本人の鍼術）

De Naaldsteekkunde der Chinezen（訳、支那人の鍼術）

door der Keizerlijken Naaldsteeker Isi-saka Sotets te Jedo（訳、江戸奥鍼医　石坂宗哲著）

これは、元来四冊のものをシーボルトが一冊に綴じたもので、それにシーボルトが表題をならべて書いたのです。本文

の冒頭に漢字で「灸法略説」と書いてありますが、これは原典の題名でなく、戸塚静海がつけたものとおもわれます。

この一冊は構成が雑然としています。訳者との関係も複雑です。第一編と第三編は石坂宗哲の「鍼灸知要一言」の部分訳で、第一編が戸塚静海訳、第三編が美馬順三訳。第四編はおなじ宗哲の「九鍼之説」が原典でないかとされています。訳者は石井宗謙です。第二編は静海訳。内容はたいそう異質のもので、漢方の小児痘瘡麻疹の説を紹介しています。しかし訳者も原文がよく理解できなかったらしく、訳文もごたごたしています。シーボルトはこれをどこにも利用していません。

鍼灸のことは日本誌の第一版にはなく、第二版の第二巻に、それぞれ "Beiträge zur Kenntnis der japanischen Akupunktur (Nadelstechkunde)"（日本の鍼術知見補遺）、"Ueber die Anwendung der Moxa"（灸の応用について）と題してかかげられています。この章は、一八三二年にオランダ語で Batavisch Genootschap の報告に出たと、註に書いています(参照　文献二)。なおケンペルの日本誌に、すでにくわしい記載がのっています。

実例五

高野長英訳「みやこの寺社の簡単な目録」（「都名所車」）

題 Beknopte list van de Tempelen en kerken te Mijako

これは「都名所車」の抄訳です。都名所車は、京都の名所になっている寺や神社の説明と行事を紹介した、簡単な案内書です。シーボルトは長英の訳文の内容を、日本誌の初版の "Pantheon von Nippon"（日本の神々）のなかで部分的に利用しています。場所によっては、長英の訳文をそのままドイツ語に訳してのせています。そのなかでも興味のあるのは、上加茂神社、下加茂神社の項です。その部分につぎの文があります。

Pilger besuchen dieses Ort sehr häufig. Das berühmte Fest *Obi matsuri* und das Pferdrennen (Kei ba) hat hier statt.

（巡礼者はここにたびたびもうでる。有名な祭オビマツリと競馬がここでおこなわれる）

このドイツ文のなかにある Fest *Obi matsuri* は、あきらかに「葵祭（あおいまつり）」のまちがいです。ところで長英の蘭文を見ますと「ヲヽビマツリ」とカタカナで書いてあります。「アフヒマツリ」とするところを、長英はなぜこのようなまちがいをおかしたのでしょう。せめて「ヲヽヒマツリ」とでもすべきところを、つい「ヒ」を「ビ」にしてしまったというところでしょうか？ それは二義的の問題ですが、シーボルトが「オビマツリ」としたのは、長英の「ヲヽビマツリ」を直接にとりいれたことの確固たる証拠として重要です。

なおこの長英の訳文には、長英のながい蘭文の序がついていて、この訳稿がシーボルトの帰国予定の一八二八年八月に長崎で書かれたことがわかります。これも重要な事実です（参照　文献二）。

実例六（複製あり、文献一〇）

美馬順三訳「日本古代史」

表題（シーボルト筆）Oudste Geschiednis, Mitologie, van Japansche Rijk en Levensbeschrijving van den eersten Mikado, door Mima Junzoo（訳、日本国の最古の歴史（神話）および第一代の帝の御一代記、美馬順三著）

これは日本書記の神代巻と神武天皇紀の大意を訳したものです。「日本誌」の“Beiträge zur Geschichte von Japan”（日本史補遺）の章にとりいれています。ただし第一次原稿はビュルヘルが順三の蘭文を忠実にドイツ語に訳して“Chronologie des japanischen Reiches”（日本国の年代記）と題しています。第二次、第三次原稿はホフマンの筆です。シーボルトはこの章に関しては主役を演じていません（文献一一を見よ）。

これも関係文献として「日本誌」の随所に脚註として出ています（参照　文献二）。

おなじ原典によってケンペルもその「日本誌」におなじ命題をとりあつかっています。

実例七

岡研介訳「事物起原」（「大和事始」）

表題（シーボルト筆）Oorsprong van alle zaken, kunsten en wetenschappen op Japan. I en II Deel. Vertaald door Oka Kenkai（訳、日本におけるすべての事物、芸術、科学の起原。第一部と第二部　岡研介訳）

内題 Oorsprong van alle de Zaken（訳、すべての事物の起原）

これは二冊で一六八丁という大部のもので、貝原益軒の「大和事始」の抄訳です。これは「日本誌」のなかで Wa-zi-si, Über den Ursprung aller Dinge von Japan in einer holländischen Uebersetzung von O. K. MS.（和事始、日本におけるすべての事物の起原。O・K・蘭訳手書）というかたちで、あちこちに文献として引用されています。またその内容をそのままつかっています。たとえば「日本誌」の「茶樹の栽培と茶の製法」のなかに出てきます（参照　文献二）。

実例八（複製あり、文献一〇）

高良斎述「日本疾病誌」

表題（シーボルト筆（Beschrijvingen van eenige op Japan voorkomende merkwardige Ziekten（訳、日本にあらわれる二三の注目すべき疾病の記載）

この草稿は「日本誌」その他に利用された根跡はありませんが、この種の資料をめぐってのシーボルトと門人との交渉を物語る重要な例です。

この例では、良斎が手書きしたものが二種あります。一つは高家にあり、もう一つはシーボルト文書に入っています。ここにかかげた表題は後者についているものです。高家本には、シーボルトの自筆の加筆がたくさんあります。シーボルト文書本は、前者の清書本であります。すなわち、良斎がシーボルトに提出したものにシーボルトが加筆し、あるいは疑問を付して良斎にもどし、ここで良斎がシーボルトの訂正、疑問を念頭において補正清書し、これをシーボルトに提出したということになります。その際良斎はさきのシーボルトの加筆のある方は手もとにおいたため、それが高家に伝わった

のです。

なお高家本にあるシーボルトの加筆によって、これがシーボルトの帰国の直前に書かれたものであることが推定できます(参照　文献二)。この二種の資料の複製本ができています(文献一〇)。

以上の実例で、門人が提出した、いわゆる Dissertation がどのようなものであったかおわかりねがえたこととおもいます。またそれらをシーボルトがどのように自分の著作にとりいれたかもおわかりいただけたこととおもいます。

ごくおおまかにかぞえまして、シーボルトが「日本誌」の著作にとりいれた門人の蘭文資料の数は、大体十一編ばかりにおよびます。そのほか門人・友人がシーボルトに提出したものが十二編あります。この事実は、おどろくべきこととおもいます。このほかシーボルトに資料を提供したり、その便宜をはかったり、またシーボルトの観察・収集を直接間接にたすけた日本人の延人員はたいへんな数にのぼることでしょう。

「シーボルト研究」(文献二)にかかげましたわれわれの論文のなかで、門人がシーボルトに提出した蘭文資料の数(カッコ内)を門人別にまとめたものを出しておきました。それを再録いたします。

高野長英(一二)、高良斎(七)、石井宗謙(五)、美馬順三(五)、吉雄権之助(三)、戸塚静海(二)、岡研介(二)、伊藤圭介(一)、鈴木周一(一)、吉雄忠次郎(一)

このほかにないというのではありません。実際にはもっと多かったのでしょう。とにかくこれを見ても、長英、良斎、宗謙、順三、静海、研介などがことに多くシーボルトに寄与していることがわかります。

ところで、門人の提出した蘭文資料のうち、どこにも利用されなかったものがたくさんあります。その理由はいくつもあるでしょう。第一、役にたたなかったということがあるでしょう。シーボルトが期待したような資料がもらえなかったということもあるでしょう。そういうことは当然あっていいとおもいます。

もうひとつ気のつくのは、「日本誌」その他に医学的な記載が非常にすくないことです。まとまっているのは、ハリと灸に関するものだけで、それも決してそれほど手のこんだものではありません。医学以外のものについては、あれだけひろく、ふかく観察調査し、資料もあつめることができたのに、自分の専門である医学について書けなかったというのはどういうことなのでしょう？　門人に課題を与えて情報・資料を収集するという手段では、門人の能力がおよばなかったのでしょうか？　シーボルトが帰国のまぎわまで、日本の医学に関する報告を門人に依頼していたということは、シーボルトにとって資料が不足であったからと考えるのが自然でしょう。実際シーボルトの門人はみな蘭学医学（西洋医学）を志していたので、シーボルトがほしかった日本の医学についての資料をかれらに期待するのは、無理だったかもしれません。それが「日本誌」中わずかにハリ灸についての、あまりながくない記事になった理由かもしれません。

シーボルトは、参府で江戸に滞在しているあいだに、例の本石町の長崎屋で、江戸の高名な医学者、蘭学者、博物学者、語学者、地図家に面接しています。その記事は参府紀行の四月十一日から五月十七日（太陽暦）にわたっています。シーボルトほど堂々と江戸のえらい人たちと対話した出島商館医師はなかったのではないでしょうか？

別のことになりますが、シーボルトは五月一日（陰暦三月二十五日）に江戸城へ商館長に随行してゆき、将軍家斉に「拝謁」していますが、そのときの情景をえがいた記事は、ほんとうにおもしろいものです。むかし一六九一年（元録四年）将軍綱吉に拝謁をゆるされたケンペルの記事（日本誌中ケンペルの江戸参府紀行）と双璧であります。

またシーボルトは帰路、京都で小林桃塢や新宮涼庭にあった記事も、注目すべきものです。

なおシーボルトがケンペルの「日本誌」を随所に引用しているのは当然のこととしても、ケンペルの日本誌のおかげでシーボルトの日本誌がこれまでにリッパに仕上がったのだと申せます。その意味でケンペルの先駆的役割は重要視すべきであります。

九、むすび

いまから百五十年まえに日本に来たシーボルトは、そのはじめの五年間――そのあとのシーボルト事件の約一年は別として――に、その強烈な個性と、自身が身につけていた医学的、博物学的方法によって、日本の蘭学書生たちをすっかり魅了しました。それらはシーボルトの意図的な人心収攬の術にはまったところもありますが、わたくしは、当時の向学心にもえた日本の青年の純真さを示すものと考えたいとおもいます。シーボルトは当時三十歳前後の若い青年でしたから、その医術のほどはそう高く評価できません。なぜなら一八二〇年代のヨーロッパの医術の水準がまだそう高いとはいえなかったからです。それでも、蘭書を通じてしか西洋医学を知るよしもなかった日本の若い医学書生にとっては、まのあたり見るシーボルトの医術は、大きなおどろきであったでしょう。オランダ政府の強力なあとおしもあって、シーボルトを名医と信じたのも無理もないことかもしれません。

一方シーボルトがになっていたもう一つの任務である日本の博物学的・民族学的調査研究ということでは、シーボルトは門人たちをはじめ、多くの人々の絶大な助力をうけました。この点では、門人はシーボルトに与えただけで、シーボルトからうけたものは、ありませんでした。

一九六六年十月東京でおこなわれたケンペル没後二五〇年、シーボルト没後一〇〇年記念会において、わたくしはシーボルトの日本への影響について講演を命ぜられましたが、わたくしはそれをつぎのことばでむすびました。

「シーボルトの死後百年の今日も、なお彼の名が日本人のあいだに語り伝えられ、ことに長崎を中心にシーボルトの遺物が保存せられ、遺跡がたえず想起されているのは、やはり日本への影響の偉大であったことを物語っている。

また当時の日本人の関係者には直接寄与するところのなかった彼の三部作 "Nippon", "Fauna Japonica", "Flora Japonica" は、かえって現在の日本人に、ふるい日本人と日本の生物についてたえず情報を提供してくれている。そのことは、シーボルトの死後百年の現在にいきている日本人が、彼に敬意と謝意とを表さなければならないところである。」

また本年四月十日東京の日蘭協会における「シーボルトと蘭学者たち」と題する講演のとき、わたくしはつぎのことばをつけくわえてむすびました。

「私はシーボルトのこの偉業を可能ならしめた日本人ことに蘭学者・蘭学書生たちにあらためて最大の敬意を表したい。また当時の蘭学者がこんなに有能であったこと、蘭語に堪能であったこと、多少たどたどしいところはあっても、現在の一般の大学生よりはるかに外国語を自由に書き、訳したことを知らなかった日本人にかわって、陳謝の意を表したい。」

そしてこのたびは、さらにつぎのことをつけくわえたいとおもいます。

「シーボルトの『日本』『日本動物誌』『日本植物誌』の三部作その他は、今日のわれわれに、むかしの日本、ふるくからの日本についていろいろ教えてくれるところが多くあります。その点でシーボルトやその共著者に感謝するだけでは十分ではありません。わたくしは、これらの著作を可能ならしめた、当時の無数の日本人、長崎奉行、和蘭通詞はもとより、シーボルトにそそのかされたきらいはあるとはいえ、シーボルトの知りたいことを蘭文につづって提供した、多くの有能な門人たちの援助を強調せずにはいられません。この門人たちの提供した情報資料がもとになり、あるいは示唆となって、シーボルトの調査研究を大いに誘発したとおもいます。その意味では、われわれは、この門人たちにも大いに感謝しなければなりません。」

わたくしはとくにシーボルトの門人たちに焦点をあわせて、かれらのシーボルトへの寄与を御紹介いたしましたが、なんといっても、あの大著を書きあげて出版したのは、シーボルトたちであります。これにはどれほど賞賛のことばをおくってもたりません。ただシーボルトたちについて、いちばん重要なことは、シーボルトも共著者も、みんな実に筆マメであったことです。そしてその筆まめを十分にいかすことのできる頭脳の持主であったことです。これにはわたくしはつくづく敬服しております。おなじことがケンペルにもチュンベリーにもいえます。

シーボルトは一八五九年（安政六年）七月に日本へふたたびやって来ました。シーボルトは六十三歳になっていました。一八六一年（文久元年）一月には幕府の顧問として江戸にまねかれました。しかしそのころの日本は、もう三十年前の日本ではありませんでした。シーボルトが「日本誌」に記載した日本とはすっかりかわっていました。開国後の日本の諸外国との関係はすでに複雑になっていました。ふるい日本だけを知っているシーボルトだけが、開けつつある日本の唯一の忠言者とはかぎりませんでした。むかしの門人の多くはもうこの世にいませんでした。旧師をねぎらう高位高官はいましたが、その数はすくなくなっていました。

シーボルトは一八六二年（文久二年）三月、たいした寄与もすることなく、長崎から日本を去りました。

シーボルトは一八六六年（慶応二年）十月十八日、ミュンヘンで没しました。七十歳でした。遺体はミュンヘンに葬られました。

シーボルトは、われわれ日本人にとっては、一八二三年から二八年までの正規の任期の五年間、多くの有能な門人にかこまれて活動した医師・博物学者として、そして三部作「日本誌」「日本動物誌」「日本植物誌」の著者または共著者として、これからもながく記念される人です。

シーボルトの人気は、ながくつづくことでしょう。

引用文献

一、呉秀三「シーボルト先生其生涯及功業」日本渡来百年記念会、増補第二版、大正十五年十月　吐鳳堂

二、日独文化協会編「シーボルト研究」昭和十三年六月　岩波書店

三、Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens: Engelbert Kaempfer (1651-1716), Philipp Franz von Siebold (1796-1866) Gedenkschrift, Supplementband XXVIII. Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens. Tokyo. 1966.

四、Ph. Fr. von Siebold: Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan and dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den

südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. Nach japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen bearbeitet von Ph. Fr. von Siebold. Ausgegeben unter dem Schütze seiner Majestät des Königs der Niederlande. Leyden Bei dem Verfasser, Amsterdam bei J. Muller & Comp. Leyden bei C. C. van der Hoek. 1832.

五、Ph. Fr. von Siebold : Nippon. /Archiv zur Beschreibang/von/Japan/und dessen Neben- und Schützländern/Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea/und den Liukiu-Inseln/von/Ph. Fr. von Siebold./Herausgegeben von seinen Söhnen./ Zweite Auflage/Würzburg and Leipzig./Verlag der K. U. K. Hofbuchhandlung von Leo Woerl./1897.

六、エンゲルベルト・ケンペル「日本誌―日本の歴史と紀行―」今井正訳、霞ケ関出版、上巻昭和四十八年五月、下巻昭和四十八年九月

七、日本学術会議、日本植物学会「ツュンベリー研究資料」昭和二十八年三月

八、文献三、四中の Reise von Batavia nach Japan im Jahre 1823〔10. August.〕の記事を見よ。

九、大槻玄沢「西賓対晤」

一〇、シーボルト文献研究室編「施福多先生文献聚影」昭和十一年四月　荒井書店

一一、日本学会・日独文化協会編「シーボルト原稿」複製（「日本古代史」原稿、「日本に於ける茶樹の栽培と茶の製法」原稿）昭和十二年十二月　郁文堂書店

一二、沼田次郎「ハインリッヒ・ビュルガーの伝記―ファンステーニス夫人の論文について―」蘭学資料研究会研究報告　第一三三号、一九七〇年四月十八日

一三、石山禎一「Dr. Heinrich Bürger の生涯について」法政史学第二二号

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月

昭和四十八年十二月十日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　一

シーボルトの処方

——とくにオクリカンクリなどのこと

小川鼎三

解体新書の出現（一七七四）のあと半世紀を経た蘭学の爛熟期に、すぐれた学才のシーボルトを長崎に迎えたのは日本の医学界にとり実にありがたいことであった。数多くの日本人が長崎において、またシーボルトが和蘭商館長と共に江戸参府の旅をしたときは、その往復の途上や江戸において直接に彼の教えをうけて、実際の学問研究は何であるかを知った。彼らの大部分は全く心酔してシーボルトの学説を聴いたものとおもう。

その中で水戸の本間玄調（一八〇四―七二）がシーボルトの行なう医術について批判的な言を残したことも今日ではよく知られている。玄調は文政十年（一八二七）七月一日に長崎に着き、二カ月ばかりの滞在で九月上旬に同地を去った。その間にどれだけシーボルトの教えを直接にうけることができただろうか。それも通詞を介してのこととおもう。呉秀三の「シーボルト先生」に門人本間玄調の略伝として「会々シーボルト先生が我邦に来朝せられて、その名高く江戸方面まで聞えたれば、直に長崎に赴き、就きて学びたるに、先生も大に外科の門人として其人を得たるを喜びて、自分知る限りのことを尽く伝授して余すところなかりしと云ふ」とある。二カ月の長崎滞在で果してそこまでできたかと若干疑問をもつのである。

医者としてのシーボルトに対する玄調の批判的な文句は森銑三氏が発表した玄調の手紙の中にみられる。長崎よりの帰途、文政十年十月十日に京都から養父の本間道偉にあてた手紙では、シーボルトがとかくにオクリカンクリをよく用いる。またカロメル（甘汞）を何病にも用いる。「梅毒はもちろん、天刑(癲か)、労瘵(肺結核)、瘟疫（急性の悪性流行病か）などまでも、カロメルにて治し候と申すことに御座候」と、その治療にやや疑問をもつような書きぶりである。

同じく十一月十九日付の手紙に「花岡の切断を当分医の第一と見受け申候、シイボルトも異国の人と申のみにて初学の様に被存候」とあって、シーボルトがオクリカンクリをよく用いるが格別の効もない。甘汞を諸病に用いるが、「これ又牛の乳と同意にて何にも効のあると申候にも之なく候、脚気などに用候も……仲景方の上に出候こと難く之あり候……」とあり、明らかに懐疑的である。もっとも甘汞と牛乳を同意とするのは今からみると甚だ危険である。

また玄調が帰郷後の文政十一年八月十五日に小宮山楓軒にあて書いた手紙にも「天下第一の英物と申候は華岡一人かと奉存候、活物窮理之一句を以て口実となし法方手術実地経験候事に候……」、ついで長崎での見聞を述べて「治術の事は蘭医シーボルトと申者罷在候、頗る奇妙なる事も有之候へ共、華岡の上に出候人物とは存不申候……」とある。当時六十七才の華岡青洲が玄調にはひどく偉い人物とみえたのも尤もであり、三十一才のシーボルトは玄調より歳が少し上だとしても奇妙な術を行なうが、あまり偉い医者とは思えなかったのであろう。それに加えて言葉も通じない。

＊　＊　＊

順天堂大学の所蔵「失勃児杜(シーボルト)験方験」（山崎文庫 No. 8145）を調べてみた。一ページ十二行の罫のある和紙四十二枚を綴じたもので、筆者がだれなのか不明だが、最初に「和蘭紀元千八百二十三年より二十七年まで、本邦文政六年より十年までに当る」と記されてあり、豊前宇佐郡生れの賀来佐一郎（一八〇〇～五七、名は佐之、字を公輔という）がちょうど文政六年から四年間シーボルトに師事したことに注目し、また後述する私の生家（大分県杵築市）の襖の下張りからでた「失伊勃児杜(シイボルト)」巻之上と下が「賀来佐之輯」とあること、両者の内容に類似点をみるので、山崎文庫本の「シーボルト験

方録」も或いは賀来佐之の作か或いはそれを基にするものでないかとおもう。これには確かにオクリカンクリ（または喇叭蛄石）と甘汞（またはカロメル）がかなり多くみられる。

例えば「痙攣自二酸液及粘液一来者　吐根五グレン、カロメル十グレン、阿片二グレン、ラツコ石二十グレン、ソイクル（砂糖のこと）右分為二十二貼一一日三貼。又の方カロメル二十グレン、吐根十グレン、阿片三グレン、ラツコ石三銭、竜脳六グレン、沙糖一オンス」

また「治二腹水一　ラツコ石二銭、チキターリス八グレン、酒石酸液三分、右八分一日三度或は四度」

また「梅毒背痛胸上膿瘍眼目障翳、カロメル三分三リ、ヲクリカンキリ一銭、阿片二グレン、右二十貼に分ち日に三貼を服す。水銀膏を貼す」とある。

わが家の襖の中からでた賀来佐之輯の「シイボルト」では右の最後の分に当るのが

「一、僧久年梅毒背痛胸上生二膿瘍一眼目障翳者　甘汞十二グレン　ラツコ石一銭、阿夫容（阿片のこと）二グレン　沙糖四銭　右四味研均分為二十貼一日服三貼一外用水銀膏」とある。

また「治二脚気衝心喘急息迫一者　ラツコ石一ドラクマ、硝石五分、銀朱三分　右三味研均分為二十二貼一毎半時以二沙羅蔔自然汁一服二一貼一」とある。これに似た処方が本間玄調の十月十日付京都で書いた手紙に次のごとくみられる。

「シイボルト治脚気腫満呼吸促迫に利不利欲衝心者方　オクリカンキリ一銭、硝石五分、朱砂五分、右三味為二細末一分為二四貼一従二其軽重一、一日一貼或二貼以二蘿蔔（大根か）汁一送下、この方頗る妙方に御座候ゆえ申上候」服用の仕方に違いがあるが、よく似た処方といえるだろう。

シーボルトがしばしばオクリカンクリ Oculi cancri すなわちラツコセキ（喇蛄石）を治療に用いたことは確かである。そこで少し調べてみると、大槻玄沢の「蘭説弁惑」巻之上に「おくりかんきり」の説明として「これは此邦にても津軽松前の地に産するサリガニといふ者の腹の中に出来る癖石なり、オクリとは目の事なり、カンキリはカンケルといふ間違に

て蝦の事なり。目といひしは形の似たるより名つけたるなり、主治功能は蘭畹摘芳の中に詳かにせり」とあり、ザリガニの図が二つ付いている。

また寺島良安の和漢三才図会巻之五十一に「於久里加牟木里（オクリカムキリ）」鰕姑（シャコ、シャクナケ、青竜鰕）頭中之小石、鮠（イシモチ、石首魚）頭の石の如き乎、能く五淋を治し小便を通ず、蛮人の秘薬なり、然れども未だ石有る者を見ず」とある。良安自らはまだシャコの頭で石をみたことがないの意であろう。和漢三才図会は正徳二年（一七一二）の作とされているから、オクリカンクリの日本渡来はよほど古くて、南蛮時代かともおもわれる。

ホヴォルカとクロンフェルド共著の比較民間薬 Oskar von Hovorka u. Adolf Kronfeld : Vergleichende Volksmedizin (1908) の巻一をみると、「カニの目」Kresbaugen はザリガニ Astacus fluvitalis の胃の側壁にある石灰塊 Kalkkonkremente で石灰塩を貯蔵してカニの脱皮のさいそれが用いられる。ローマ時代のディオスコリデスがすでにその薬効を指摘した。結膜嚢に入った異物をとり除くのに「カニの目」を用いる。バイエルンでは胸やけ Sodbrennen にそれを内服する。ザリガニの体を焼いた灰で狂犬病が治る。蜂蜜と合せると手足のひび、しもやけ、癌性潰瘍が治る。生まのまま磨りつぶして羊の乳と合せるとヘビ、クモ、サソリに噛まれたときに効く、海のカニのほうが効きめが少ない等とある。バイエルンはドイツの南部であり、シーボルトが生れて育ち大学生活まで卒えたヴュルツブルグはそれに接する土地であり、民間薬オクリカンクリがその辺りでは幅をきかせていたと推察できる。日本でも北海道や東北の一部ではザリガニの体を磨りつぶしてウルシかぶれなどの治療に用いると聞いた。

* * *

次に山崎文庫本の No. 8144「支母爾篤（シボルト）察病法」について述べる。これは筆者名を欠き、本当にシーボルトの察病法を伝えるものか確実でないが注目に値いする。表裏各十行の縦の罫と知生堂蔵の印刷をもつ和紙九枚が綴じられている。

二性・三質・四宗・五見・六泄・七問・八脈の七章に分れていて、まず二性ではステニセ（実）、アステニセ（虚）の二

つが論ぜられる。この分け方はブラウン John Brown (1735-88) の学説に基くとロイエンダイク・エルスホウト博士から教えられた。

四宗は煩衝病・神経症・腸胃病・皮表病の四つであって、「皆コノ四宗ヲ患者ニ区別スルヲ西洋医学館ノ第一ノ教トスル所ノ常用ナリ、故ニ是ヲ諸書ニ不言ナリ、此四宗ヲ心中ニ蔵メテ蘭書ヲ見ルトキハ自ラ解スル所多シ、知サル者ハ蘭書ヲ解シテ処ヲ得サルナリ」とある。

五見は顔面・眼中・口舌・皮肉・起居の五つ、六泄は大小便・吐痰・発汗・出血・咳血・膿潰の六つである。

八脈は強・弱・大・小・遅・数・渋・厥の八つである。「脈ハ一分時ニ（ミニュート半時ノ六十分ノ一ナリ）六七十度ノ間ヲ常脈トス、人々少シク異ナリ、……遅数以テ例シ、寒熱ヲ計リ、血液ノ粘膠ト稀淡トヲ計リ、西洋ニテハ一患者毎ニ時計ヲ以テ是ヲ計リ、熱病ニ於テ尤肝要ナリ……」とある。

打診と聴診について何も書いてないのはその時代のドイツ医学では当然といえる。

* * *

少数の文献をみただけで結論をいうわけにゆかないが、医者としてのシーボルトは眼科、外科、産科などでわりあい多く日本人を啓蒙したであろうが、内科では理論は教えても実地の治療面でどれだけ効果をあげ得たか疑わしい。後に瘍科秘録、内科秘録などの良書を著した漢蘭折衷派の本間玄調がわずか二カ月の長崎滞在でシーボルトの治療法に疑問をもったのも当然といえる。しかしそれはシーボルト個人の責任ではない。当時のドイツ医学の水準を示すのである。

私が医史学者として特に敬服するアッカークネヒト教授 Erwin H. Ackerknecht が著書 Kurze Geschichte der Medizin (1959) の中で述べている文をここに引用する。「ドイツでは十九世紀前半の臨床医学の水準は低かった。この世紀の初め二、三十年はロマンチックな自然哲学 romantische Naturphilosophie の魔法の下にあった。イギリスやフランスの方がずっと進んでいた。ドイツの医者は生命や病気の本態について想像を逞しくし、極の観念 Polarität やパラケルズ

流の大宇宙、小宇宙の類似対比に思いをめぐらしていた」。これでは古医方の先試実験主義で鍛われた日本人の医者たちに劣るのではないか。

そしてアッカークネヒト教授はシェーンライン Johann Lucas Schönlein(1764-1836) がドイツで初めて科学的な臨床医学をやり、しかも母国語で教えた。しかしその時代でも生物学と外科は比較的よかったとして、すぐれた生物学者として Ignaz Döllinger, Johann Friedrich Meckel の二人をあげ、すぐれた外科学者（眼科、整形外科などをふくむ）として Langenbeck (senior), von Walter, Stromeyer, Graefe (senior), Dieffenbach の名をあげている。シーボルトがヴュルツブルグ大学で特に Döllinger に私淑して、その髪の毛まで持って日本にきていたことが注目されるのである。

南方熊楠 人と思想

編＝飯倉照平　逸話と伝説に彩られた生涯。巨人熊楠の全貌を、桑原武夫、稲垣足穂、柳田国男ら24氏の評論、追想記等で描く。■1,200円

南方熊楠全集 全12巻／別巻1

書簡補遺・論考補遺

監修＝岩村忍・入矢義高・岡本清造　南方熊楠の伝記資料として重要な土松翁宛、出版関係者等によせた書簡類、また「鳥を食うて王になった話」他の論考。■3,500円

近代医学の発達

著＝R・H・シュライオック　訳＝大城功　医学技術の発達のみならず、医学と、それをとりまく社会的、文化的環境との相互作用にも注目した古典的名著。■3,500円

平凡社

東京都千代田区四番町・振替東京29639

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月　昭和四十八年十二月二十一日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　二

画家の眼を開いたシーボルト

兼重護

私はもともとシーボルトの研究家でも医学史の研究家でもなく、美術史を少しばかり研究しているものでありますが、たまたま幕末の長崎の画家川原慶賀〔天明六年(一七八六)～万延元年(一八六五)以後〕なる人物に興味をもったことから、シーボルトに関りをもつことになったわけです。慶賀は、通称登与助といい、シーボルトの『江戸参府紀行』にもその名がしばしば出てきますように、シーボルトのあらゆる研究の資料のための絵を描いた人物です。

私が慶賀に興味をもったのは、八年前に長崎に参りまして、一枚の慶賀の絵を見た時からであります。この絵は『蘭人絵画鑑賞図』(図1)という題名がついている一種の戯画的な作品であります。この図を見ますと、人物が漫画的に誇張されており、特にその表情の描写など非常に面白いものがあります。また、陰影をつけて立体的表現をしようという意図もうかがわれます。ご承知のように、蘭学の導入と共に、絵画の面でも西洋画法つまり写実的に対象を表現する技法、具体的には、明暗法、遠近法が我国にも知られるようになり、それを用いた絵画が描かれるようになり、いわゆる洋風画なるものが生れてきたわけです。長崎もその洋風画の一つの拠点となったわけですが、その洋風画家の一人として川原慶賀もあげられると思います。

さて、この『蘭人絵画鑑賞図』には、実は、原画がありまして、それを写したものなのです。この原画は、フランスの

画家ボアリー（L. L. Boilly, 一七六一～一八四五）の石版画で、図柄は等しいのですが、慶賀の作品は、単にそのままコピーしたのではなく、独自の着彩をし、のびのびと描いているところに、慶賀のオリジナリティが感じられます。

慶賀は、当時の長崎画壇にあって、実力はかなり認められていたものの、御用絵師として認められていた唐絵目利四家（渡辺、石崎、荒木、広渡）を主流とすれば、そこからはずれた、いわゆる町絵師でしかなかったのです。しかし、どういう経緯からか、すでにオランダ商館長ドゥーフ（一八〇三年より商館長）の時代から出島に出入りしており、ドゥーフの肖像、あるいは次の商館長ブロムホフの家族図なども描いています。

慶賀がシーボルトおつきの絵師になったことはご承知のとうりですが、これはおそらくブロムホフからの推薦によるものであろうと思われます。現在ライデンの民族学博物館に慶賀の作品が収蔵されていますが、つい先月（九月）のはじめに、それを見る機会を得まして見て参りましたが（風俗図、七十点、鳥の図、五十四点、動物図、十八点、魚の図、二十三点、虫の図、百種類、植物図、三百四十種、折本として、社寺境内図、諸道具図、大名行列図、人間の誕生から死まで各一巻）、ライデン民族学博物館学芸員のファン・ヒューリック（W. R. Van Gulik）氏の話によると、ブロムホフの収集品も、この中に含まれているとのことで、すでにシーボルト来朝以前から、慶賀はブロムホフの委嘱により、日本の風俗などを描いていたことがわかります。こういったブロムホフとの関係から、慶賀はごく自然にシーボルトお抱えの絵師になったものと考えられます。

図1

ここで私が問題にしたいのは、シーボルトが、画家慶賀にどのような影響を与えたか、ということであります。シーボルトにとって慶賀は現代でいえば単なる写真機代りであっただろうと思うのです。そして写真機は、見えるものそのままを写しとる、ということが第一の機能であります。慶賀はまさに自らの眼と手によって、その役割を果さなければならなかったわけです。美術史的な観点からいえば、写実という問題につき当ることになります。そこで、写実という点において、一介の町絵師慶賀が、シーボルトからどのような影響を受けたのか、もちろん、シーボルトは画家ではありませんので、絵画のスタイルの上に直接影響を与えることはあり得ません。画家自身の対象の見方に影響を与えていると考えなければなりません。これから実際の慶賀作品によって、シーボルト以前と以後の作風について比較してみたいと思います。

まず『ブロムホフ家族図』（図2）といわれているもの、これは数点あるわけですが、ほとんど同じような構図で描かれています。これ（図2）は神戸の南蛮美術館にあるものですが、部分的にはひだ付けなどの影がついていますけれども顔などは線が中心で、あまり立体的な表現が行われていない。一見、浮世絵風で、主題は西洋的なものを扱っているわけですが、まだ、いわゆる西洋画ということは言えない面もあります。

次の図（図3）は、ライデンの民族学博物館所蔵の中の一つなのですが、構図的に非常に面白いと思います。たとえば階段を利用して、大勢の人物の長い行列を一つの画面の中にうまく収めている。この図は、ある人間の誕生から墓場に入るまで、いろいろな場面を当時の風俗を混えながら描いた、人間の一生とでもいうべきシリーズの一つで、葬式の行列を描いたものです。このシリーズは、ライデン民族学博物館の整理番号では、ブロムホフ収集ということになっていましたのでシーボルト以前の作品ということがいえましょう。部分的に、たとえば僧侶の衣のひだなどに陰影法が用いられていますが、表現は線が主体となっています。決して西洋画的な、という印象は受けないものであります。

この長崎のおくんちの場面を表わしている図（図4）もライデンの博物館所蔵の一つです。これにしましても、非常に絵画的に作りすぎているというところがある、それが面白いところなのですが、絵画的にアレンジしてしまっているとこ

図 2

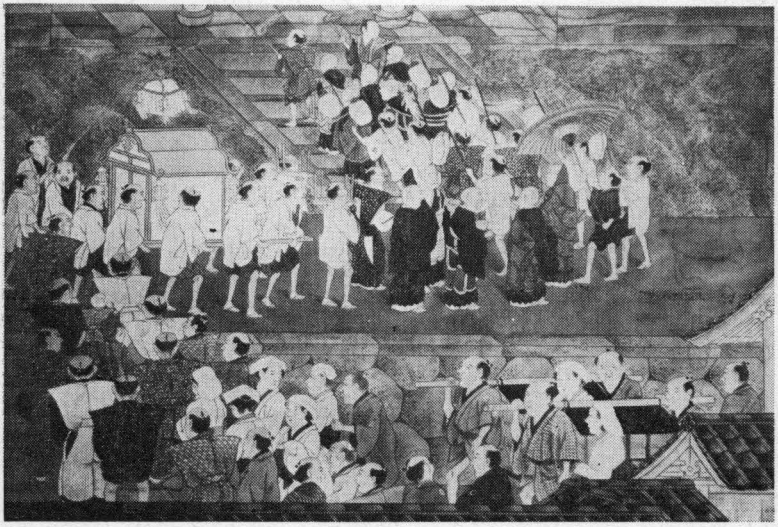


図 3

ろがある。多くの顔にしましても、ずらっと並べてしまって、おくんち全体の雰囲気はよく伝えているのですが、いわゆる真の写実というところからは遠いように思えます。

これまで見ていただいたのがシーボルト以前のものであろう、と考えられるものです。（図5）は、現在長崎市立博物館に所蔵されています『唐蘭館絵巻』の中の一部であります。これは、はっきり慶賀晩年の作品ということがわかっています。蘭館内部の調理室を描いたものですが、室内の壁面や調理台は明かに線遠近法を用いようとし、かなり成功していると思われます。また人物の表現も、線的でなく、陰影によって立体的に表現され、さらに細かいところも、そのまま写しとろうとしています。

以上のことから考えますと、シーボルト以前の絵画は、絵画的には面白いのですが、写実という点からみると、装飾的にすぎる、作りすぎているということ、浮世絵的な感じがする。ただ全体の雰囲気はよく捉えている、特に風俗画の場合にそういうことが言えると思います。

シーボルト以後のものでは、遠近法的な試み、あるいは明暗法で陰影が強くなっている、と言えます。シーボルト以前と以後で、絵画のスタイルが全く変ってしまった、とまでは言えないにしても、より忠実な写実に向ったということは言えると思います。

もう一つ言えることは、絵画上に表われたものよりも、画家慶賀の作画態度というものに影響を受けているのではないかということです。ということは、彼が絵を描くという仕事が、人を楽しませるとか、室内を飾る、というだけでなくてもっと他の価値がある、つまり慶賀自身が、絵を描くことは学問と同じ価値がある、といった信念をシーボルトによって学んだ、ということです。事実、シーボルドが帰った後も、日本に残ったシーボルトの助手ビュルゲルを通して魚類の写生図など、異常な情熱で描き続けています。こういった膨大な量の細密写生を続けることは骨の折れるしかも根気のいる

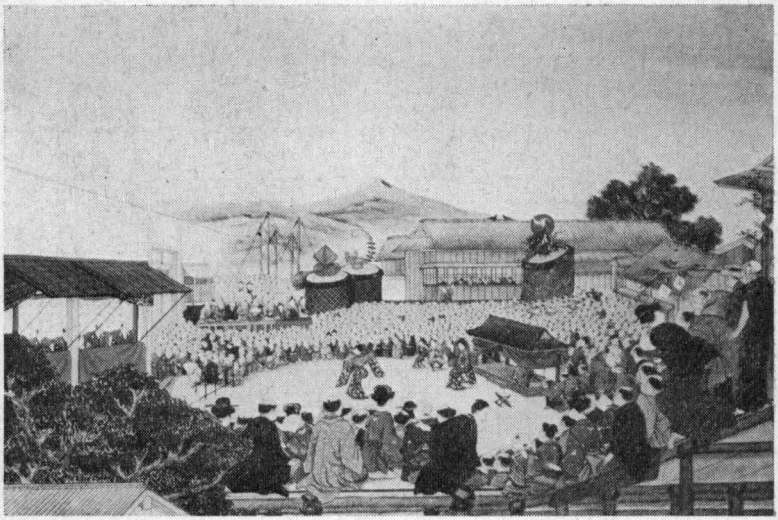


図 4

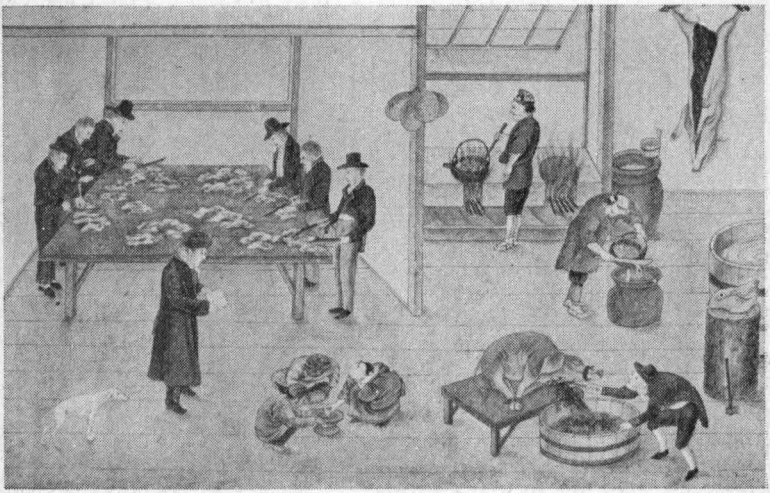


図5 料理部屋の図

仕事だと思います。それを支える何かがなければなかなかできることではないと思います。その支えとなったのが、シーボルトの学問に対する情熱、態度であったと思うのです。慶賀は、常にシーボルトの身近にあって、それを見、学問の大切さを知り、しかも、自分の写生するという仕事も、その学問に寄与しているということを自覚したのだと思います。

シーボルトに会わなければ、一介の町絵師で終ったであろう画家を、もう一つ別の世界に眼を開かせた、という点で、ここにもシーボルトの単に病を癒す医師以上の人格をみることができると思います。ただ、シーボルトが、芸術としての絵画、もっと広く芸術一般について、どのような理解をしていたのか、つまり芸術というものにどれほどの興味をもっていたのか、そのことの追求が今後に残された課題だと思います。

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月
昭和四十八年十二月十二日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　三

シーボルトと長州

田中助一

私はシーボルトと長州との関係につきまして二、三の資料によってお話ししてみたいと思います。

(1)　シーボルトが名医であるかどうかということにつきましては、先程、緒方（富雄）先生および小川（鼎三）先生からお話がありまして、当時のドイツの医学の水準あるいはシーボルトの年令、修業期間、こういうことからしまして、それほどの大家であったとは思われないという、私も同感であります。しかしながら、シーボルトが長崎にまいりまして間もなく、シーボルトが非常な名医であるという噂が各地に拡がりました。私の今おります山口県の萩市は長州藩の城下町でありましたが、長州藩は九州の諸藩と同じように、長崎に聞役（キキヤク）という一つの機関を設ける特例がありまして、沿岸を防備する関係上、藩としては大藩でありますから、長崎と常に往き来がありまして、情報も早くキャッチしていたわけなのであります。こういう関係からして、長州藩の御用商人でありました熊谷（クマヤ）五右衛門（名は義比）という人は、シーボルトが名医であるという噂を早く聞き知っていたと思います。この熊谷五右衛門はシーボルトより年が一つ上でありまして、そういうほぼ同年の人であります。たまたま熊谷五右衛門が足や膝が痛いということから、長崎に行ってシーボルトに診察を受けたいということになりました。これは診察も勿論目的でありましょうけれども、大きい商売をしておりましたために、長崎の実状を見るということも一つの目的であったのではないかと思うのでありますが、兎に角、文政七年（一八

二四）十一月頃に長崎でシーボルトの診察を受けております。そして、そのまま長崎にしばらくいまして、更に文政八年三月島原藩領の小浜温泉に湯治にまいりました。その帰りにまた長崎に寄りまして、シーボルトに会い、その年の六月十一日シーボルトに暇乞いに行っておりまして、その時記念に貰って帰りましたカットグラスが今日も熊谷家に残っております。五右衛門が自筆で箱のふたにそのことを書いておりますので、間違いなくシーボルトにその時会ったということがわかります。

シーボルトが長崎を旅行で留守をしていたことがありまして、その時にはシーボルトの所に岡山から勉学に来ておりました児玉順蔵が長崎におりました。この人は熊谷家から学資の補助を受けておりまして、小川先生の話に出た「カロメル」とか「オクリカンキリ」などの処方を出しております。岡研介もこういう処方を出しておりまして、あの当時こういう真似をしたものとみえます。「シーボルトが早く旅行から帰ってくればよいが」ということを児玉順蔵が熊谷に宛てた手紙のなかで書いておりまして、自分では手に負えなかったのか、先生の帰るのを待っております。こういうことになりますと、シーボルトはやはりかなり頼りにされた医者であったということが解るわけであります。こういうものがありまして、やはりシーボルトの名声というものが各地に伝って、いろんな人がシーボルトの治療を受けに来たということがわかります。そして、先ほど緒方先生のお話にありました論文のなかに「クマヤ」というのがありましたが、これは実は高野長英の代筆でございまして、これを下関でシーボルトに渡しておるわけです。その論文は「早稲播種法」と「藍染について」という二つでありまして、これは昨日申しましたように、高野長英も熊谷家から学資の補助を受けておりましたので、これを代りに書いて出したのであります。このように熊谷五右衛門も医者ではありませんけれども、今そういう免状が残っているかどうか、私はまだ見ておりませんけれども、そういうもの（論文）まで出しております。

それから、今日、実は惜しいことをしたと思いますのは、シーボルトが帰りますときに、熊谷五右衛門に今まで知られておりませんでしたピアノを贈っているということと、そのシーボルトが亡くなりまして、七年ほどたった明治七年に、

シーボルトの息子がシーボルトが日本で採譜して帰っておりました楽譜をウイーンで出版しております。この楽譜を熊谷のピアノで演奏して貰った録音がありますので、それをここで聞いていただくとよかったのですが、うっかりして持って参りませんでした。大変残念なことをしたと思っていますが、また機会があったらいつか録音を聞いていただきたいと思います。これを聞きますと、シーボルトはおそらく文政時代に長崎にいましたときか、あるいは大阪の方に旅行したときか、兎に角「カッポレ」を採録しております。従来「カッポレ」という曲は、天保頃に大道芸人が流行させたということになっておりますが、シーボルトがこれを第一回目の時に採録して帰ったものでありますならば、少くとも文政時代に、天保時代より早く、シーボルトが書いていたということになりまして、音楽史の方からも大変面白いのでございます。

このように熊谷五右衛門という人は、高野長英とか岡研介には随分補助をしておりまして、また岡研介に頼んでいろんな蘭館からでるものを沢山集めたり、いろんなものを手に入れております。そして自分が使用するだけではなしに、医者が「ジギタリス」がいるとか、酒石酸がいるという時には快よくわけておりまして、そういう資料がありまして、随分いろんな人のためになった人であります。そういうことが熊谷五右衛門の資料でわかります。

(2) 次に現在の防府市の医者で杉山宗立(ソウリュウ)という人がいまして、この人が一代記を残しております。今から三十三、四年前に私はそれを詳しくみることができまして、それが「海塩の製法」の論文を出した人でありますが、筆跡は明らかに戸塚静海の代筆ということになっております。杉山宗立という人は古くからあります三田尻古浜(コハマ)の塩田経営者であります。塩田のなかで生れた人でありまして、先祖が医者をしていた関係もあって医者になった人で、塩田は自分の庭のようなもので、非常によく知っていたわけですから、おそらく原稿は自分で書いたと思います。それを戸塚静海に頼んでオランダ文に直してもらい、お礼をして出したものと思います。

この杉山宗立の一代記によりますと、文政八年二月十六日に三田尻を発ちまして、すぐ近所の嘉川(カガワ)という処におりました井本文恭(ブンキョウ)という弟子をつれて、長崎のシーボルトの講義の見学に行ったのであります。そして二月二十四日に長崎につ

いておりまして、約二ケ月滞留しています。しかし、杉山宗立も井本文恭も多少蘭学には関心があって、研究会などをやっておりますが、オランダ語はわかりませんから、講義および診療のときには岡研介に通訳を頼んでおります。これは書いて残しておりますが、岡研介という人はやはり同じ周防の国の平生（ヒラオ）というところの出身でありまして、そして広瀬淡窓の高弟であります。非常によく出来て、淡窓の門人の三羽烏に入る天才でございますが、この広瀬淡窓のところに、杉山宗立の兄（良哉、儒者）の子の威八郎という人で、のちに儒者になった人が勉強に行っておりましたので、宗立は行くときに豊後の日田の広瀬淡窓の塾に寄って、杉山威八郎に逢い、また淡窓にお礼をいって長崎に行くのでありまして、こういう関係から、淡窓の高弟でありました岡研介ともおそらく杉山威八郎から紹介して貰ったのか、あるいは淡窓から紹介して貰ったものか、長崎に行って、同じ郷里の出身であります岡研介の通訳によってシーボルトの講義と診療を見聞して帰ったのであります。その時、たまたま、シーボルトが乳癌の手術をするということになりまして、ところが、杉山宗立はその前に乳癌を一度治療しております。それを宗立の一代記で読みますと、「シーボルト、乳癌療法諸国書生数多の内、余と岡研介病室へ入る。婦人の乳癌日本にて治療することを聞かず。紀州華岡瑞軒（ママ）（随賢）なる者、初めて之を切ると云う。西国にては予初めて之を切る。後崎陽に遊ぶ。此時蘭医シーボルト亦之を切る。日本諸生六、七十人居合すと雖も治療するもの無し。蘭医、余が以前療治したることを聞きて尋問す。この故か治療の時、余を病室に入る。然れば、予が名は蘭国へも達すべきか」と自分の名がオランダへも聞えるだろうかということを書いて残しております。その時、杉山宗立は五十才でありまして、その三年前の文政五年の春、杉山宗立は初めて乳癌の切断手術を行っておりまして、華岡青洲の手術はその十八年前の文化元年になります。そのようにシーボルトが乳癌の手術をするというのに、たまたま杉山宗立が三年前に経験があるというので、入れたということを書いております。このように、やはり、三田尻は交通の要地で、いろいろな人が往復に寄りますので、シーボルトの名声を聞いて長崎に勉強に行ったものと思います。

(3) それから、江戸参府紀行で下関の記事では文政九年正月十六日（一八二六年二月二十六日）にシーボルトは下関に

着きまして、二十四日まで足かけ九日ほど下関に滞在しております。着きまして三日目の正月十九日の早朝、シーボルトの門人やその他の医師が病人をつれて診療を受けに行っております。その時シーボルトが泊っておりました家は西の大年寄の佐甲甚右衛門の家でして、そこへ医者が皆難しい患者をつれて出かけて行ったわけです。シーボルトは医者と対診しまして、「このときはこういう治療をしたら良い」と教示をしています。そのことは江戸参府紀行にシーボルト自ら書いておるところであります。その正月十九日の午後には、佐甲家と東の大年寄の伊藤家の両方の補助を受けて、下関で開業して盛大にはやりました山口行斎という人がおります。この人は山形県の庄内出身の人でありまして、長崎の吉雄の塾に勉強に行っておりまして、シーボルトの来る前に、自分の国に帰るため、下関まで来たときに、伊藤とか佐甲とかいう人達が「無理に遠い出羽まで帰らなくてもここで開業したらええじゃないか」といって援助しまして下関で開業し、大変流行しました。運悪く早く亡くなりましたが、今も立派な墓が伊藤家の墓地にあって葬ってあります。このように山口行斎がこの時下関におりましたので、シーボルトは行斎の家に午後行きまして、鉱物標本などを行斎が蒐集しておりましたので、それを見ました。そこにもまたシーボルトの友人や病人が待っておりまして、その友人のなかに熊谷五右衛門がいました。その前日には兄の熊谷五郎左衛門が行っておりまして、明日弟の来ることを前触れしておいて、そして逢ったわけです。その時、先刻の論文を渡したものと思います。その翌日には長門の国、周防の国より門人や知人が訪ね、病人の治療を頼み、また珍らしい贈物をしております。この時、門人と会うのは前からの約束でありまして、研究論文を提出させて、ドクトルの免許状を、与えるということであります。この時山口県の医者で行ったものが、杉山宗立・井本文恭・河野孝伯、もう一人（横田宗碩）です。そういう人が行って論文を出しましたことはシーボルトのメモ（大久保利謙氏の報告）に書いてありますので、解っております。そこでシーボルトの手記によりますと、患者を診察し、また手術など施しまして、田舎の人々が大いに驚嘆したと江戸参府紀行に書いてありますから、相当手際よく、派手にやったのではないかと思います。正月二十二日の晩、いよいよ下関を去るという日に長府藩の侍医、おそらく松岡道遠かと思いますが、こ

れが行きまして、シーボルトに会いました。その時、シーボルトがその侍医に数種の新薬および「薬品応手録」というポケットブック、これは珍らしい本で、先年大阪の医史学会で出してありましたが、あの本は日本でコーヒーのことを書きました非常に大事な本で、コーヒーの研究家が注目しておるものでありますが、これを渡しております。

こういうようにシーボルトはやはり、実力は別としまして、対外的には当時、非常な名医として全国的に知られたのではないかと思うわけで、シーボルトは彼なりに多くの人を感服させ、治療を施しまして感謝されておったというふうに私は結論いたします。

（追加）萩の熊谷家に「文政八酉之六月、長崎出立前進物勤帳、并幸村市左衛門持参物扣」と表紙に書いた一冊の大福帳があります。これは熊谷五右衛門が長崎を去るに際し、世話になった人達に贈り物をするため番頭の幸村（コウムラ）市左衛門に萩から持って来させた品物の目録であり、シーボルトには「籐組硯箱壱（但桐箱入）、緋縮緬壱疋（但代銀弐百五拾五匁）、硯蓋鷹に梅の蒔絵」の三品、カピタンには「越後縞壱反（代六十五匁五分）」がとどけられています。この籐細工は藩政時代萩の名産品でありました。通詞の吉雄権之助やシーボルトの門人岡研介、湊長安其他多くの人にも贈っています。即ちこの記録によって岡や湊が当時長崎に居たことが明確に立証されるわけであります。

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月
昭和四十八年十二月十二日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　四

シーボルトの治療法

中野操

シーボルトは一七九六年ドイツのウユルツブルグで生れ、一八二三年（文政六年）の夏、オランダ商館附医官として長崎に渡来した。その後、不幸な事件で日本追放となるまでの五年間、オランダ人や日本人の助手をつかい、非常な熱心さで日本を科学的に研究し、一方またかれの名声をきいて、長崎にあつまった多くの日本の青年たちに、西洋の臨床医学の実際を紹介した人として有名なことは周知の通りである。

ところで、奈良県の天理大学図書館に『メイストル・シーボルト直伝方治療方』、『シーボルト治療日記』という二冊の筆写本がある。文政十年ごろ長崎に遊学し、吉雄幸載の青嚢堂塾に入って西洋医学を学んでいた信陽月都の宮原良碩という医師が、幸載のところにシーボルトが巡廻してきていろいろの病人に対し治療や手術を実施したのを直接見学して筆録したものであり、シーボルトの行なった治療とか手術の模様を具体的に述べたところのほとんど唯一の史料として実に貴重な文献である。

さて筆者の宮原良碩というのは、信陽月都の宮山堂主人とあるので、信陽すなわち信州（長野県）で、月都は月に関係があるところとして更科あたりであろうか。宮山堂は良碩の医院の称呼である。いろいろ調べたが詳しいことはわからない。しかし文政十年の夏のはじめには遠く長崎に遊んで吉雄幸載の塾に入り、西洋医学について学んでいた篤学の青年医

師と思われる。

良碩が筆録した第一の文献『シーボルト直伝方治療方』には、左記の六症例をあげ、それぞれシーボルトが施した治療法、手術様式、後処置、投薬処方等が記載してある。

1　諸熊仙輔　陰嚢水腫
2　お岩（二十有余才）　喉頭部腫瘍
3　西浜正蔵　痔瘻
4　西浜正三郎（六十有余才）　咽喉糜爛
5　河内屋九郎右エ門（五十有余才）　咽喉癌
6　野口律兵衛（十二才）　頭部腫瘍

第二の文献『シーボルト治療日記』は、前記第六例の頭部腫瘍に関するもので、腫瘍の性状、シーボルトの腫瘍全摘出の手術式、手術後の経過、処置等見聞したままを忠実に記述している。この二点の文献については、昭和十三年に大鳥蘭三郎博士も簡単に報告されたことがあるが（『シーボルト研究』所収「シーボルトと日本における西洋医学」）、私は私なりに調べたところを述べて責を果たしたいとおもう。

腫瘍は「頭上右ノ耳ノ上少シ後エ下ガリ脂肪瘤アリ。大サハ根ノマワリ九寸（鯨尺）、高サ一寸五分バカリ」と、かなり大きなものであったが、これに対し、シーボルトはビルゲルという薬剤師を助手として、文政十年五月二十七日、腫瘍の全摘出手術を実施した。手術開始の皮切より、腫瘍摘出、十針皮膚縫合後カスガイ膏を貼布、包帯を施して手術を終るまで、九ツ半時より八ツ時に及んだ。すなわち午後一時開始、二時に終ったわけである。もちろん無麻酔であるが、患児は「治術中甚元気ヨク、能ク痛ミテ忍ビ敢テ叫喚セズ。頗ル武士ノ心意、満座之レヲ感嘆称賛ス。術後笑談如常」というわけで、さすが武士の子弟でその強い自制心と、忍耐力とに満座を感嘆させたというのである。

術後、清涼剤として硝石二銭（二ダラクマ）を一ポンドの水で煮て飲服せしめ、また暮れ六つ時（午後六時）になり鎮静剤としてラウダーニュム十滴を白湯に加えて与えた。

この手術を見学したシーボルトの門人は、岡研介、高野長英、二宮敬作、戸塚清(静)海、石井宗謙、伊東救庵(舅廸)、中尾玉振、松本雲徳、鈴木周一の九名である。この人たちが連日連夜交代で吉雄塾に泊り、患児の容態を診察し、かれらの手におえない病状については深夜といえども樺島町の幸載塾から数百メートルはなれた出島におもむき、患児の状態をシーボルトに伝えてもらい、適切な処置や処方を教えてもらって塾へ帰ってくるのである。

手術の翌日(五月二十八日)。前夜来微熱を発し軽い頭痛を訴えるが元気はよく大小便快通。午前シーボルトに容躰を報告したが、シーボルトは前方を引続き与えるように命じ、又頭痛がはげしければ脚湯法を施こせといった。午後になり熱ますます高く、強い頭痛と心下痞悶を訴え、二更（夜十時）ごろには一時人事不省の状を呈した。

五月廿九日　病状さらに険悪、三更（夜半0時）ごろ突然「咬牙瞠眼、四肢弯杓、呼吸困難」をおこす。メンタ油にラウダーニュム五六滴加えたものを与えようとするが切歯しているので牙関を撑してこれを与えた。また鼻孔から礪砂精を吸入せしめる。そのうちにようやく弯急がおさまり目をとじて鼾睡することまるで卒中風のようである。刺絡のために腕をトイルネケットでしめたが全く静脈がうかない。夜半二時すぎ岡研介ら出島に往き、小通詞中山作三郎を通じて容態悪化をつげ、シーボルトの指示を仰ぐ。シーボルトの処方は「ジギターリス四瓦、水半ポンド」、前後にカロメル一ゲレインを加え、茶匙二度内服。処置としては、両跗に発泡膏貼用、頭部の冷罨法、水蛭の使用。

六月一日　病状相かわらず重篤、早朝石井宗謙が出島に往きシーボルトの指示を仰ぐ。処方はジギターリス煎汁茶匙二度、米煎汁二度を加え飲ませる。頭部冷罨法、水蛭貼用をくり返し、浣腸と瘡口の蜀葵汁洗滌を指示。

この日の夜十時までで記録は終っている。しかし奥書に「病人死云々」とあるので、まもなくこの少年が死の転帰をとったことが推測される。

上記資料により明かとなった二、三の点につき述べておきたい。

(1) 呉秀三氏は、シーボルトが楢林、吉雄両塾で診た患者中、大手術を要するものがあるときは鳴滝学舎に移して手術することとしたと記しているが、周径鯨尺九寸（三十余糎）、高さ一寸五分（六、七糎）という巨大な頭部腫瘍の摘出手術のようなことを吉雄塾入院のまま実施した例もあることがわかった。

(2) 患者の容態が悪化した場合、門人たちが昼夜をとわず樺島町の吉雄塾から出島までかけつけ、通詞を介して病状をシーボルトに告げ、処方や処置につき教えをうけた。これに対しシーボルトは深夜といえども臨機適切な指示を与えている。これにより師弟間の交情まことに掬すべきものがあり、ひいてはシーボルトの医師としての良心とか責任感、また門人たちのシーボルトに対する敬愛信服の念の深さなどがうかがえるのである。しかし手術後急速に容態の悪化して行く患児の病床を一度も訪れず、彼れ自身の目で病変の性状をしっかりと見きわめて、より適切な処置を考えてやらなかった点については、かれを支えていた医師の倫理の未熟さを露呈したものと指摘したい。

ちょうど一ケ月後の七月一日、水戸の本間玄調は長崎に着き、さっそく吉雄幸載塾に入門している。そして十七日になりやっとシーボルトに従学を許されている。これは玄調に同行した眼科の本間玄俊の手紙に「吉雄幸載え入門の儀相願、同十七日入門相調申候。斯以勃児都え直には随身仕候様には相成兼候事故、吉雄之門弟と名目を称し斯以勃児都へ入門仕候様に相成申候」とあるのによっても明らかなように、まず吉雄幸載なり同如淵なりの塾生となり、蘭学の手ほどきをうけたり、いろいろの下準備をしたりした後でなければ、シーボルト門に入れなかったのである。ところが幸載塾では手術後四日で死んだ少年のことなどまだ日も浅いので玄調の耳にもすぐ入ったであろうし、やがてシーボルトに師事するようになってからも、なにしろ既に華岡青洲のところでいろんな手術を見学してきたあと故、どうしても青洲シーボルトの両者を比較し批判的に見ることになる。

東京都世田谷区静嘉堂文庫所蔵の『小宮山楓軒叢書』を先年閲覧したが、そのなかに養父の本間道偉に西遊中の本間玄

調が紀州平山村や長崎から書きおくった手紙や玄調から楓軒におくった手紙などがあった。それによって芳野金陵の撰した本間玄調墓碑銘にあるような、先ずシーボルトにつき次いで青洲門に入ったとするのはまちがいで、青洲門で多くの奇病大患を見学した上でシーボルトに入門した事実を識った。そこへ吉雄塾へ来てすぐ、シーボルトが頭部腫瘍の手術後四日目に死なせたことなど玄調の耳に入ったのはタイミングとしてもよくなかった。それで「花岡の切断を当分医の第一と見受申候。シーボルトも異国の人と申のみにて初学の様に被存候」と道偉に書き、また「天下第一の英物と申候は華岡一人かと奉存候(中略)。治術の事は蘭医シーボルトと申者罷在候。頗奇妙なる事も有之候へ共華岡の上に出候人物とは存不申候」と楓軒に書きおくったような印象を特に強く感じただろうと考えるのである。

種痘に対するシーボルトの貢献も看過してはならない。第一次日本渡来のとき、長崎や江戸で牛痘接種を実施したが、不幸にも痘苗がすでに変敗していて不成功におわった。しかしかれの教えた種痘の知識と種痘の手技とはその門人たちを大いに啓発した。またたびたび種痘書をとりよせて門人に与えた。日高凉台の『種痘新書』、美馬順三の『牛痘接法』、本間玄調の『種痘活人十全辨』などが出たのもシーボルトのおかげである。かれが大槻玄沢に与えたオランダ種痘書は、早稲田大学図書館に現存する。嘉永二年(一八四九)、モーニッケが長崎で牛痘接種に成功するや、愚昧な人情や漢方医の妨害などをうけながらも、日本の各地に燎原の火の如く種痘法が拡がって行ったのは、シーボルトのまいた種子がすでに十分発芽に適した状態にまで進歩的な医師たちの間で醞醸されて来ていたからに他ならぬことを忘れてはなるまいとおもうのである。

蘭学史におけるシーボルトの役割

沼田次郎

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月
昭和四十八年十二月十二日受付

このシンポジウムの主題は「医師としてのシーボルト」ということである。しかし私は医学を専攻した者ではないので、医師としてのシーボルトについては本来述べる資格がないのであるが、医学研究を主とした蘭学の発達の歴史の上でシーボルトの及ぼした影響という観点から、きわめて概括的なことを述べてみたい。と言っても、実はさきほど緒方博士がその講演の中で述べられたことと多分に重複する惧れもあるので、その点はあらかじめ御諒承を願いたいのである。

さてシーボルトの日本に関する業績は大別して二つの方面に分けて考えることができる。第一に国内における蘭学あるいは医学の研究教育上におけるそれであり(国内的)、第二に彼自身の日本研究及び日本紹介すなわち西欧における日本学研究史上の業績である。

第一の問題については今更詳説を要しないと思うし、とくに今日も他の講師の方々から詳しい御報告があった上に、時間もないので省略するが、後者について少しく付け加えることとする。この第二の問題についても、大別すれば、

(一)　彼自身の多数の研究業績、とくに代表的な「ニッポン」「日本植物誌」「日本動物誌」のような論著。

(二)　彼が日本から齎らし帰った膨大な蒐集品がヨーロッパ各国における日本研究の資料として後世を益したこと。

の二方面を挙げることができようが、この両方面を通じてシーボルトの役割は非常に大きく、その先人をはるかに凌ぐも

のがあったことはいう迄もない所である。とくに㈠については周知の点が多いが、㈡についてはこれまで比較的知られる所が少ない。それはその数量が膨大で多方面にわたるためにその研究が困難であること、またそれが各地に分散しているためその調査があまり行われていないこと、のためである。私とてもその点では全く同じであるが、若干の情報を記しておく。

彼が日本で蒐集した種々の資料は、単に文献資料だけでなく、例えば絵画・彫刻・器具器械・民芸品類・芸術作品から動植物標本や人類学的資料等々、きわめて多方面にわたり、また膨大である。それらのコレクションは数ケ所に分散しているが、その中で最も有名なのはいう迄もなくオランダのライデンにある国立民族博物館 Rijks-Museum voor Volkenknude にあるコレクションである。このコレクションは一口にいえば、主として人類学的コレクションで約五〇〇〇点に上ったというが、その外にも宗教的なものなど色々なものを含んでいる、といわれる。現在のこの博物館の日本関係のコレクションはオランダ政府がシーボルトから買上げたこのコレクションを基礎として出発したものという。しかしシーボルトが日本から持ち帰った、あるいは本国に送ったコレクションは実はこの外にも沢山あったのであって、その第一はミュンヘンの民族博物館が今日所蔵するものである。

シーボルトは一八六六年ミュンヘンに移り住んだ時、残りの——オランダ政府に買上げられた残りのコレクションをミュンヘンの Hofgarten-Arkaden に陳列したという。間もなくシーボルトはミュンヘンで亡くなるが、一八七四年バイエルン州がそれらをシーボルト未亡人から買取り、ミュンヘンの民族博物館に収めた。そのコレクションの特徴は、種々の技巧を用いた漆器類、日本で大量に生産される陶磁器・絵画及び木版画・書籍・手写本の類ということである（その大体の内容は一九六六年十月同館で開かれたシーボルト没後一〇〇年記念展覧会のカタログ Katalog zur Ausstellung: Philipp Franz von Siebold im Staatlichen Museum für Völkerkunde, München によって知ることができる）。

ところがシーボルトの蒐集は実はこの外にもまだあった。例えば彼の子のハインリッヒ Heinrich Freiherr von Siebold に伝わった品は、その数も六〇〇〇点を超えるが、一八九〇年にオーストリアのウィーンの民族博物館に寄贈されたということで、同館の日本関係収蔵品の凡そ半ばを占めるという。尤もハインリッヒの持っていたものはそれだけではなく、この外のある部分はライプチッヒ Leipzig のグラシ博物館 Grassi Museum に入り、また他の一部はチロル Tirol のフロイデンシュタイン Freudenstein のキャッスルに置いてあったが、ハインリッヒ没後一九〇八年にウィーンで競売に付せられた。その際、そのうちの一部はまたグラシ博物館に入り、他の部分はイタリーのヴェネチアのアジア博物館 Museo Asiatico に入った、ということである。

このような例を以てみても、彼シーボルトの蒐集品はヨーロッパ諸国における日本関係蒐集品の中でも重要な役割を占めたことを知りうるであろう。

以上、第一第二の点を通じて彼の業績が大きく効果的であり、大きな意義を持つ理由としては、第一にもちろんシーボルトの学力のすぐれていたことを挙ぐべきであろう。学力というより研究能力というべきかも知れない。この点は今日の主要な問題で、私よりも今日の諸先生の指摘に待つ必要があるが、私見を以てしても、彼の博物学的知識は非常に博大であったと思うし、指導力・組織力もすぐれていたことが認められる。これは一つには彼の家柄・血統にも負うところが多いと思うが（例えば、Hans Körner : Die Würzburger Siebold, Leipzig, 1967 参照）、主著「ニッポン」を見ればよく判るし、また緒方博士がその門人との関係において述べられたことからも認められるところである。

このような意味の彼の学力を第一に挙ぐべきことはいうまでもないが、更にその外にも幾つかの事情を考えねばならない。すなわち第二には、彼はオランダ政府から日本研究を公認されていたこと、否、むしろその任務を与えられていたということである。その日本派遣の任務の一つとして医学その他の教育を行なうことを認められていたことを指摘したい。例えば、彼が日本に来朝した一八二三年の翌年、つまり一八二四年十二月二十六日付で出島の商館長ストゥルレル Joan

Willem de Sturler が長崎奉行高橋重賢に送った書翰には以下のように見える。

昔オランダ人が日本人に教授した医術とくに外科学、植物学、天文学、地理学が今日もなお学ばれていることはバタビア総督の熟知する所でありますが、実はそれ以後多くの事項が発見されて学問・技術は非常な進歩をとげています。これまでオランダ人が日本人に伝授した学問・技術には多くの誤謬がおこっていると考えます。そこで総督はそれを訂正すべき命を授けて昨年シーボルトを貴国へ派遣しました。これはまた一面医術その他の科学を学習しようとする人々に適当な教授を施し、オランダ人医師の治療を受けようとする人々に個人的に医療奉仕をするためであります。シーボルトは医術とくに外科的手術・眼科学・産科学、植物学・物理学・地理学に経験ふかくオランダでも有名な医者であります。従って日本商館長たる下名は、昨年シーボルトが病人を往診したり薬用植物採取のため時々市内へ立入る許可を求めました。シーボルトは既に当地に殆んど一年間滞在して内科の治療や外科手術に従事し、多くの病人を危篤の状態から救い出したことも多くあります。この一年間その医術を行なうことによって日本人の状況その他を良く経験したので、同人は誰彼の区別なく、長崎市あるいは諸国からの多くの病人を治療することに、より一層の力を注いだのでありましょう。もし帝王の侍医にせよ大名の侍医にせよ、オランダ人医師から療法の伝授を受けたい人があれば、日本政府に多くの費用を煩わさずしてシーボルトをもっと長期間日本に滞在させてよろしいのです。そしてそれは二百五十年間オランダ人が日本で受けてきた多大の御厚恩に報いたいためであります。敬具。註

シーボルトが凡そ五ケ年にわたるその日本滞在中、非常な努力を以て日本についての研究に、また日本人学徒への教授に努めたのも、彼の学者としての研究心に基づくことはいうまでもないが、また一面右に見えるような——多少誇張されているかも知れぬが——使命をおびて来朝したからである、と言って差支えあるまい。

このことは、当時外国人に門戸を閉ざしていた日本に来た外国人にとっては非常に重大な条件であった。彼の先人たちは鎖国下の日本で自己の研究を遂行する上に非常な制約を蒙ったのであるが、それについては一々述べない。ケンペルや

ツンベルクの来日滞在当時の状況を想起すれば足りることであるが、それにくらべてシーボルトは第一に多額の研究費を政府から支給されているし、また必要とあれば研究のために助手を付けてもらっている（H. Bürger : Villenieuwe 等の例を見よ）。また日本では、その実際の活動に当って日本政府オランダ政府双方から種々の便宜を計ってもらった。

これらの条件の上で彼はその先人と雲泥の差異がある。この条件は資料蒐集の上ではとくに大きな効果があったことはいうまでもない。もちろん蒐集の上だけでなく、彼の研究教育遂行上大きな条件と成りえたことはいうまでもないことである。

彼のこのような意味での日本派遣については、更に進んで何故彼がこのような使命をおびて来日することになったのか、その理由を述べる必要があろう。それは一言にしていえば、当時のオランダが置かれた国際的条件と国内的必要から生じたことである。しかしこの点については、今日の緒方博士の講演においてすでに指摘された所であるから省略する。

次にシーボルトの影響が大きかった理由として考えねばならぬことは、シーボルトを迎えた当時の日本人蘭学者の蘭学習得の意欲が強く、またその学力・学問的水準が高く向上していたこと、すなわちシーボルトの学問を受けとめる側の条件が非常によかったことである。西欧文化、西欧の学術に対する意欲の強かったことは既に説くまでもない所で、それはむしろ一般に外来文化に対するわが国民の特性でもあるが、例えば中国における場合などと較べると著しい対照をなしていることである。従って解体新書の訳述ということも起りえたのであるし、それ以後における蘭学の進歩もありえたわけであるが、その蘭学は、いわば直接教師の指導を受けることの少ない、殆んど書物のみに頼る蘭学であった。それ以来凡そ半世紀、シーボルトを迎えた当時の蘭学はこのような教師に頼ることのできない独学、書物だけに頼る独学同様の蘭学としては、およそ行ける所まで到達し、進歩していた、と考えてよいのではないかと思う。従ってシーボルトによって、当時のヨーロッパの最新の医学が伝えられると、それを十分理解するだけの学力の素地ができていたと考えることができ

るのである。受ける方の学力・基盤がゼロに等しいのでは、いくら教え伝える方の学力がすぐれていても、教えた結果も根無し草に終る惧れがあるが、当時の蘭学界の状況は右のような次第であったので、十分に彼の伝えるヨーロッパ科学とくに医学の水準を理解することができたのであった。

もちろん手術その他の実技の上では多少問題もあったことは諸先学の指摘される所であって、今日も小川博士・中野博士等の指摘された通りである。何分来朝当時二十七才、大学を卒業していくらもたたない青年であったから、実地の上で万能の「名医」であった筈はない。しかしそもそも彼が身につけていたヨーロッパ医学の水準と、独学的であったわが国の蘭方医学との間には格段の差があった。さればこそ彼の教えが非常な影響力を以て、既に右に述べたような意味での学力に達していたところの蘭学者に受けとめられたわけである。

既に与えられた時間を超えたので以下簡単に述べるが、それに加えてシーボルト来日当時の日本においては、日蘭接触の条件が非常に緩和されていたことを考慮に入れることも必要である。古く遡れば、享保時代以来いわゆる田沼時代においてもそれが見られるわけであるが、その時代はしばらく措いて、シーボルト来日に先立つ時期、すなわちドゥーフの時期以降のことを考えるとそれがよく判るであろう。とくに私が指摘したいのはシーボルト来日当時までの商館長ヤン・コック・ブロムホフの存在である。

ブロムホフの商館長としての在任は、例えばドゥーフに較べると長いとはいえない。しかし彼は日本人との接触のひろく且つ深かった点では歴代商館長のうちでも有数の人である。彼がオランダ名を授けた日本人の多いこと。彼が書いて贈った筆蹟・書蹟の日本国内に残っているものの多いこと。この点では歴代商館長のうちでも随一であろう。また来日当時若く美しい夫人と小児を伴っていたことも広く日本人の間に知られていたし、商館長在勤時にオランダの演劇を日本人に紹介したことでも知られていた。ブロムホフは、シーボルトが来日すると直ぐ当時長崎に滞在していた湊長安・美馬順三

・岡研介等多くの蘭学者に彼を引き合わせている。

このような日本人と接触の広く深い商館長の存在がシーボルトと日本人蘭学者との接触を容易にし、また日本側当局者に影響力を持ったことは十分考えられるところである。またこれに対して、当時の長崎奉行以下の当局者がこのような日蘭接触の雰囲気の中で、シーボルトに対して好意的な取扱いをすることができたこと、これまたシーボルトの在留時に幸いした条件の一つとして考うべきことであろう。もちろんこのような日本側当局の態度の背後には当時の蘭学に対する要請といういわば政治的条件があったことも見逃すことのできない問題である。文政年間という時点を考えてみると、当時の国際情勢の変化のなかで、政治的観点からみても実用科学・実用技術としての蘭学に対する要請が新しく感ぜられてゆく時期であり、いわば技術の学としての蘭学に対する時代の要請が増大してゆく時期であったこと、これがやはりシーボルトの来日に寄せられた期待の背後にあった問題である、と考える。

以上、きわめて大まかなことであるが、「医師としてのシーボルト」が日本に与えた影響の大きかった理由について考えてみた。

私はかねがね東西文化の接触という見地、いやむしろ西欧文化の世界的拡大という見地から考える時、日本とオランダとの接触はきわめて幸福な東と西との「出会い」であった、と考えるものであるが、以上のような条件を考えるとき、シーボルトの場合は、そのなかでもとくに稔り多き「出会い」であったということができよう。

註　呉秀三「シーボルト先生、其生涯及功業」乙編二九七―八頁、出島瓜哇蘭語文書第五号。

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年一月
昭和四十九年二月十二日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　六

医師としてのシーボルト

山形敞一

私がシーボルトのことを知りましたのは、呉秀三先生の大著シーボルト先生によるものでありますが、その記載のなかにはいくらか誤まりがあるようです。

私が気がつきました第一は、小関三英は長崎に来てシーボルトに入門したという記述であります。小関三英については、昨年総会の会長講演で述べたように、文政六年十月、鶴岡の開業を打ち切って仙台藩医学校蘭方内科教授として赴任、文政八年四月鶴岡に帰ったのち、文政十年九月、旧友の湊長安を頼って江戸に出て、天保三年一月岸和田侯侍医となり、さらに湊長安と前後して、天保六月四月幕府天文台訳員に任命されています。

シーボルト事件について、三英は江戸から郷里の兄へ宛てた手紙のなかに、「蘭人シーボルトも当八月は帰国いたし候由」（文政十一年七月十三日）とか、「先年蘭人ニ官服ヲ送候事露顕致候ゆへニ御座候。右取組候蘭人モ長崎ニて御預ニ相成居、未帰国も出来不申候由、同人より今度願上候趣ハ、某地図等を所望仕候ハ物数寄ニ仕候事ニて全叛逆之為ニハ無御座候。もし御疑心も御解不被成候ハバ某を永く日本ニ御差留被差置蟄居ニ被成候共、又ハ如何様之御成敗ニ被成下候共よき様ニ被成下度段願上候由ニ御座候。右御糺之義今一等手広相成候事ニてハ迷惑仕候人も此上多出来可申、何れにしても気之毒ナル事ニ御座候」（文政十二年三月一日）と報告しておりまして、シーボルトに同情的ではあっても、師弟関係

があったとは思われ難く、また、長崎に来たこともないのであります。

その第二は、シーボルトの弟子の湊長安のことであります。

呉秀三先生は大著のなかでシーボルトの「ニッポン」を引用して、「余が文政六年出島に到着せるとき、余に暫時の後、蘭館長ブロムホフの紹介にて当時長崎にありし医師と近付きになれり。そのうちには江戸の名ある湊長安、阿波の美馬順三、三河の平井海蔵、岡研介等の医師、万有学者ありたり」と記し、さらに、「皆和蘭より新来の医師、万有学者の名を聞きて、長崎に集れるなり」と書き足してあります。しかし、シーボルトの「ニッポン」を読み直してみますと、後段の文章は書いてありません。「当時長崎にいたすぐれた医師達と知り合った。そのなかには江戸の有名な湊長安、阿波の若い美馬順三、さらに三河の平井海蔵、岡研介ら多くの医師や学者がいた」と書いてあるだけであります。

大槻玄沢の手紙などから考えますと、湊長安は文政五年二月江戸でブロムホフと面談したのち志を立て、同年九月江戸を出発しましたが、京都に来たとき西国の暴瀉病の発生を聞き、その症状からコレラと診定しています。長崎に着いた湊長安は吉雄塾と楢林塾に従学しているうち、文政六年七月にシーボルトが来朝したとき、ブロムホフの紹介で出島で面会したのであります。もっとも、高野長英が文政八年長崎に留学したのはシーボルトの名声を聞いて決心しておりますから、シーボルトが長崎に来て一年ぐらいたった頃にはその名声が江戸まで聞えていたようであります。

昭和二十九年私がドイツに留学したときウュルツブルクにいたドイツ人医師とシーボルトの胸像を探しましたが、これを建てたのはバイエルン森林協会であり、私の友人も「植物学者の胸像である」といっておりまして、ドイツでは医師としてよりも植物学者として有名なようであります。

シーボルトはウュルツブルク大学を卒業してから一年間近郊で開業したのち、翌年オランダ軍医となり、日本に来たのは二十八才の青年医師であります。

シーボルト自身には医学者としての著書はありませんが、彼の名前で流布している医書を検討すれば、ある程度医師と

してのシーボルトを知る手がかりになります。

私が持参したのは岡研介の「用薬摘要」と合本になっている「失以勃児杜験方録」で、安政三年の写本です。

呉秀三先生によりますと、湊長安は文政十年に「シーボルト経験方」、文政十一年に「内科備用」を著わしたと書いてありますが、私は「至母爾篤筆授略記」など数種の写本を持っており、これらを検討してシーボルト直伝の医学を検討し、「湊長安の医号」と題して発表しておりますので、（日本医史学雑誌昭和一八年一月一八日）、今日は「失以勃児杜験方録」を中心にして述べたいと考えます。本書には「和蘭紀元千八百二十三年ヨリ二十七年、本邦文政六年ヨリ十年迄ニ当ル」と脚註されてあります。

本書は系統立つものでなく、シーボルトが長崎などで経験した症例の処方を筆記したもので、オクリカンキリ、キーナ、ヤラッパなど彼の好きだったと思われる処方が随所に用いられています。そして、現在の知識からみても妥当と思われるものがかなりみられます。

ところが、湊長安の訳述した「至母爾篤筆授略説」をみると、シーボルトの講義を長安が飜訳したもので、一つ一つの病気の原因、症状、診断、治療につい体系的に述べたものです。

それで、問題となるのはシーボルトの教え方がどんなものであったかということであります。シーボルトは初め出島で治療しましたが、特例を認められて吉雄塾や楢林塾へ出かけて難病患者の診察をして日本人の医師に教え、さらに鳴滝塾でも臨床講義をやって蘭方医学の実際を教えたのではないかと思います。

そして、湊長安や高良斉のような蘭学の素養がある医師が傍にいてメモをとっていたものが湊長安の「シーボルト経験方」や岡研介の「失以勃児杜験方録」であると考えられます。これは、高良斉の「西説眼科必読」のなかに、「シーボルト先生の傍に侍し親しく此術を観るものは、余と湊長安、三間順造三人のみ」と記されていることからも明らかであります。

なお、日高凉台の手紙によれば、日高凉台とともに鳴滝塾に住みこんだ門弟は、美馬順三、戸塚静海、岡研介の三名でしたが、次いで高野長英の手紙によれば、吉雄権之助塾より長英ら三名が鳴滝塾に寄宿したことが記されています。

シーボルトは文政六年（一八二三年）七月出島に着いたときは二十八才ですが、湊長安は三十七才、美馬順三は二十九才、高良斉と岡研介は二十五才です。

ポンペが安政四年長崎に来たときはシーボルトと同じ二十八才でオランダの軍医学校で勉強したノートを持って来て講義をしましたが、シーボルトもウュルツブルク大学時代のノートを持って来て門弟に教えたと考えられます。しかし、湊長安の「至毋函篤筆授略説」の内容をみると、シーボルトの臨床講義のメモをとっただけでなく、シーボルトのノートを借りて筆与したのではないかという可能性も考えられます。「筆授略説」という題名はこの可能性を示唆しています。

シーボルトが来朝したのちにバタビアから長崎に送らせた蘭書目録をみると万有学の蘭書ばかりで、医書は載っていません。これは、シーボルトが来朝後万有学の参考書を必要としたためで、医書は来朝したときに持参して来ていたとも考えられます。

岡研介の失以勃児杜験方録のなかにはコンスブリュック法という処方がありますが、コンスブルックの医書は文政七年の著述で、文政九年に長崎に輸入され、文政十年に高良斉が「西医新書」四十二巻として訳述しております。その題言には、「丙戌の歳、蘭舶此書を斎らし来る。先生之を予に授けて曰く、吾医法渾て此書中に在り。汝謹で之を読めと。予受て之を読み、先生に就て疑を質し、年所にして訳述の業を卒へたり」と記してあります。したがって、文政六年にシーボルトが来朝したときはコンスブルック以外の蘭書かノートによる臨床講義をしていたものと思います。

これは、オランダのヒポクラテスと称されたライデンのブールハーヴェ（一六六八～一七三八）によって始められ、現在ベッドサイドティーチングとしてわが国で一般に行なわれている臨床教育と同様な方法であったと考えられます。

これまで、わが国における西洋式の医学教育はポムペによって基礎をおかれたようにいわれており、シーボルトの功績

は呉秀三先生によって始めて明らかにされたとはいっても、医師としてのシーボルトについては断片的に伝えられたに過ぎませんでした。

これは、シーボルトの来朝の第一の目的が日本の万有学的研究にあって、ポムペのような西洋式の医学教育の普及にあったのでなかったためと思います。また、日本の万有学的研究材料をあつめる手段として門弟にベットサイドで直接に教えたシーボルトの医術はシーボルト事件で鳴滝塾が壊滅的打撃を受けたため、ポムペのときのように組織だった形では残らなかったものと思います。

しかし、シーボルトが鳴滝塾で門弟に教えたブールハーヴェ式の臨床教育は、江戸の湊長安、浪華の高良斉らの門弟教育にあらわれています。

したがって、シーボルトは長崎のブールハーヴェとして再評価されて良いのではないかと考えられるのであります。

日本医史学雑誌・第二十巻
第一号・昭和四十九年三月　昭和四十八年十一月十二日受付

シンポジウム　医師としてのシーボルト　七

日本眼科学史上のシーボルト

福島義一

目　次

一、シーボルトの眼科
二、シーボルト散瞳薬伝授についての試論
三、シーボルトの白内障手術
四、むすび

一、シーボルトの眼科

昭和四十八年はオランダ商館医シーボルト Philipp Franz Balthasar von Siebold 1796-1866 がわが長崎出島へ渡来してから百五十年を迎えるので、長崎大学が中心となって色々の記念行事が催された。その代表的なものは、第七四回日本医史学会総会、渡来百五十年顕彰式典、学会シンポジウム、記念講演会ならびに資料展覧会などであった。さきに、渡来百年記念行事の行なわれた時代（大正十三年、実は大正十二年が正しいが、関東大震災によって延期）とその後五十年を経た百五十年記念行事の行なわれる現在とは、其後史料の調査研究も進みシーボルト史観について変化を認める。私は、主として日本眼科学史の立場からシーボルトを検討してみた結果を発表する。

彼は、一八二〇年ウュルッブルグ大学医学部を卒業して、しばらく開業した後、オランダに移り、オランダ領東インド勤務の陸軍外科少佐に任ぜられ、植民地における自然科学の研究を嘱託せられた。其後、パリ・フランクフルト・ボンなど遊歴して極東研究の準備を終え、一八二二年ジャバに向って出発、わが安政六年（一八二三）八月長崎へ着任した。彼の第一回目渡来時の日本滞在は六年間余であったが、この短かい期間内において驚く程多くの日本および日本人に関する調査研究を遂行し、また、わが国近代黎明期の諸科学、特に、医学に大きな影響を与えた。彼の渡来当時のわが眼科は、主として漢方眼科或は、漢蘭混合眼科が行なわれていた時代で、西洋眼科知識は、杉田立卿著「眼科新書」と当時輸入せられていたオランダ語原書（主として外科書の眼科の部）から伝来されていたが、それは言わば書物上の知識であって、西洋眼科の実際については未だ知られていなかった。

この「眼科新書」の原本は、ウィーンの人、プレンキ Jakob von Plenck 1738-1807 の眼科書 Doctorina de morbus oculorum (1777) の改訂第二版 (1783) をプロイス Pruys がオランダ語訳して出版した。(1787) 本書がオランダ商館を経てわが国へ輸入せられ、宇田川玄真(榛斎)が和訳して「泰西眼科全書」と称したが、未だ刊行されなかった。(1799) 其後、この稿本に杉田立卿が訂正増補を加えて、はじめ「和蘭眼科全書」つづいて「眼科新書」として刊行した。(文化十二年 1815) 本書の刊行は文化十二年であるからシーボルト渡来より僅か八年程以前であるが、本書原典は既に一七七七年の出版物であって、シーボルトにとっては四十六年も以前の簡明眼科書である。このような古い眼科知識しか持たない当時のわが眼科医師の水準を彼が低くみたのは当然であった。ただ、光学的虹彩切除術と白内障手術（墜下法）とに於いて、西洋眼科におとらぬ進歩のあったことを認めた。しかし、当時のわが国においては発明発見があっても、何事も秘伝として公開教授をしなかったので、広く行なわれたものではなかった。

シーボルト修学時代、ヨーロッパ眼科学界においてはウィーン大学眼科学教授ベール Joseph G. Beer 1763-1821 の名声が最も高かった。その著 Lehre der Augenheilkunde(1792), Lehre von den Augenkrankheiten (1813, 1817) など

ヨーロッパで広く読まれ、また当時新興の眼科学の修得をめざして彼の許へ集まる学生が多かった。

ヒムリー Karl Himly 1772-1838 は、イエナ、ゲツチンゲン各大学教授を歴任したが、一八〇一年はじめてベラドンナを点眼散瞳薬として眼科臨床に使用して、之れを Mydriatika と命名した。この薬剤はシーボルト修学時代には既に医家の常備薬で、決して珍らしいものではなかった。むしろ、白内障手術にあたって、術前に之れを使用するのが常識であった。

果たしてシーボルトが誰人に就いて眼科学を修得したか？ 明確ではない。しかし、彼がウュルツブルグ大学在学当時 Kajaten von Textor が外科学と眼科学とを講義し（1816-1833）、彼の祖父 Karl Kaspar von Siebold が同大学で外科・解剖・産科・眼科の諸学を講義したし、彼の伯父 Bathlei von Siebold も同大学で眼科学を講義したというから、以上諸氏の影響を受けたことは当然と思われる。しかし、彼が眼科学に特別深い興味を抱いて各地の碩学の門をたたいたという事実はない。

シーボルトがわが眼科に影響を与えた事項を要約列挙してみると、

(1) 書物によって伝えられていた西洋眼科を実地について指導伝授した。（西洋眼科学臨床講義の始め）

(2) 解剖学に立脚した眼疾患の分類を教示した。

(3) 西洋で発達した開眼手術、特に光学的虹彩切除術（William Cheselden, J.G. Beer）ならびに、白内障摘出手術（Jacques Daviel）などを実施した。

(4) 西洋眼科薬剤の使用法と製法の伝授、特に散瞳薬を伝えた。

本稿においては、散瞳薬と白内障手術とに限って述べる。

二、シーボルト散瞳薬伝授についての試論

シーボルトと言えば散瞳薬、そして散瞳薬と言えば土生玄碩（幕府眼科医官 1762-1848）が有名である。しかし、色々の史料から考えてみると、シーボルトが最初にわが国の医師へ散瞳薬を伝授した人物であることは明確であるが、之れを最初に伝授された人物は、決して土生玄碩ではない。彼以前に、既に散瞳薬を識り且つ之れを実用していた人物として、少なくとも三名を挙げることが出来る。即ち、高　良斎（「眼科便用」、「西説眼科必読」、「泰西眼科必読」など。何れも未刊稿本として伝わる）、馬島圓如（秘薬環製羔）および本庄普一（「續眼科錦嚢」天保八年刊）である。当時幕府最高の眼科医官であった土生玄碩、玄昌父子が全く散瞳薬を識らなかったということは考えられない。彼等は、書物か人伝えかによって散瞳薬を識り、既に秘薬として実用し始められていたことも知っていた。但し、シーボルト伝授のこの薬剤が長崎から東進して実用に供されていた疑いが濃く、江戸では未だ実見する機会が無かった。このような時期に、シーボルトが江戸に到達したというのが正しい。

シーボルト著「江戸参府紀行」（斎藤　信訳平凡社版）によれば、シーボルトが江戸で眼科医の前で散瞳薬の実験を実施したのは、文政九年（一八二六年）四月二五日（旧三月一九日）のことである。即ち、同書には

「四月二五日　将軍の侍医、特に眼科医の訪問をうける。私は眼科についての書物と眼科関係の機械を一緒に見せる。瞳孔をベラドンナによって広げる若干の実験を行なう。その著しい効能に大喝采を博す。以下略」

ここにおいて、初めて土生氏は、散瞳薬を実見し、且つ、若干入手することが出来た。しかし、土生父子はわが国において散瞳薬は産出するか？　すればその場所や製法の伝授をシーボルトに求めたが彼は容易に伝授しなかった。

ここにおいて、シーボルト求めるところの将軍家紋服を与えて、その結果、散瞳薬の存在と製法を知ることが出来た。後日、シーボルト事件起こり、当時国禁の紋服を外国人に贈与した罪によって、土生父子は重刑を受ける身になった。しかし、之れによって散瞳薬はわが国へ伝わり彼の功績は眼科学の発達に寄与すること甚だ大であったというのが俗説である。土生父子シーボルト関係史料は、事件発覚と同時に極力消滅につとめたらしく現存資料は甚だ少ないので、創作や想

像が加えられて史実を誤り伝えられていることが多い。

シーボルトが散瞳薬伝授の交換条件として将軍家紋服を求めたという史料は未だ発見されていないし、シーボルト自身は当時、既にわが国においても実用化し始めていたこの薬剤は、紋服と交換条件になる程、珍貴なものとは思っていなかったと考えられる。あるいは、紋服を更らに低く評価していたのかも知れない。

しかし、かねて蘭館高官たち、特に、甲比丹ストウルレル、シーボルトらが将軍家紋服を望んでいたことは事実であって、土生父子が先にストウルレルに紋服を贈り、散瞳薬伝授の下心から、希望なればシーボルトにも贈るという様な申出をしたことは充分考えられる。そして、散瞳薬伝授の前後二回以上にわたって紋服を贈った疑いもある。（呉　秀三土生玄碩先生伝「土生玄碩先生第百五十年記念会贈位祝典記事」大正五年）

文政九年、土生氏の用人神保玄貞がその門人田野辺意休に贈った書簡（小川剣三郎「日本眼科小史」一六五頁）には、

「先年和蘭人参り候節医師シーボルトより日本唐土にも無之秘方秘術等伝授いたし候に付願の上度々参り居り候処、シーボルト紋服望み候故、側に居り合候者のすすめにより御紋服を遣候由　以下略」

即ち、「側に居り合候者のすすめにより」贈呈したことになっている。このすすめた人物が、果たしてストウルレルか幕府医官であったか判明しない。

更らに、既述の史実は、文政十二年（一八二九）十二月十六日土生玄碩改易申渡書によって確認することが出来る。

「　西丸奥医師　土生玄碩（寅六十九）同道人寄合医師久志本左京、上田東哲

前略……伝授受度存、夜中忍候而、度々罷越、阿蘭人と懇意を結び候得共、容易に者伝授致間敷、カピタンへ相頼候わば可然と存付、カピタンへ歓候品遣し渡、居合候者之教に任せ、何之思慮も無之、着し居候御召御紋之羽織を差遣、薬法伝授之儀取計呉候様相頼申処、シーボルト儀も右体之品希望、申聞候に付、其後時服御紋付御帷子差遣し候処、薬法伝授致呉候間、為謝礼尚又御紋服差遣候段……以下略」

以上の史料から考按してみると、シーボルトが江戸で散瞳薬の実験を行なった時には、既にわが国医師の間では之れを識り、又、実用され始めていた。当時幕府最高の眼科医官であった土生玄碩、玄昌父子は散瞳薬入手をあせり、シーボルト江戸滞在の好機を逸することが出来なかった。散瞳薬の伝授は、シーボルトの方から将軍家紋服を交換条件として申出たものではなく、むしろ、土生玄碩の方から積極的に贈与したものである。而も、改易申渡書によると、「居合候者の教えに任せ」着用の御召御紋之羽織を贈呈し、更らに、時服御紋服御帷子を贈呈し、ここで散瞳薬の伝授を受け、その謝礼として三度目にも御紋服を贈与したことになる。実に三回に亘って当時国禁の御紋服を贈った玄碩は、「ただ何の思慮も無之」理由によるものかどうか大いに検討を要する課題である。

尚お、不思議に思われることは、シーボルト所持土生玄碩贈与の御紋服発覚のことである。シーボルト事件の発端は、必ずしも蘭船コルネリウス、ハウトマン号の破損のみに限らず、間宮林蔵の密告も関与していることは事実であろう。事件発生からシーボルト居宅検索まで十日程も日数が経っていたので、その間に、シーボルトは地図その他重要史料は複写し、又、蘭館長に極秘保管を依頼した事実がある。土生氏贈呈の紋服はシーボルト居宅にあったから容易に隠匿出来た筈であるが、事実はその居宅で押収発覚された土生氏一家は悲惨な結果を招いた。シーボルトは、紋服が国禁の品であることを重視しなかったのではないか。次ぎに、シーボルト伝授の散瞳薬の本態について言及してみよう。従来、ハシリドコロ、マンダラ蔓陀羅華、チョウセンアサガオなど諸説がある。シーボルトから西洋眼科を指導された第一人者、高　良斉（一七九九～一八四六）の遺稿、「眼科便用」、「西説眼科必読」には、次の記載がある。

「吾シーボルト先生能く此莨菪の煎煮を用いたり、莨菪和名ハシリドコロと云う、深山陰地に生ず、宜しく自ら採取し新に製し用うべし、オンセンノヲルト曰く、ヒヨシャーム煎煮も同効なり、欠くに遭へば代え用うべし」

江戸参府の途次、宮で水谷豊文（一七九一～一八三三）の植物標本コレクション中に、シーボルトが見出したのはハシリドコロに相違なく、江戸では土生父子がロートエキスの製法を教示されたものと思う。私蔵の「眼科新書」の莨菪の項

の欄外に悉鳩答、莨菪、烏頭、蔓陀羅花、比与私沙謨斯等煎熬大概同効外敷瞳孔開大之奇効と朱書されているものがある。シーボルト事件後、間もなく右の諸薬が散瞳薬として知られるようになったものと考えられる。

三、シーボルトの白内障手術

古代インド人によって発明された白内障手術（墜下法）は、洋の東西を問わず、その術式や器械に改良進歩をとげつつ実に十八世紀中葉にいたるまで実施されていた。ところが、一七四五年四月八日フランス人ダビエル Jacques Daviel 1696-1762 が水晶体摘出という白内障手術を行なって近世眼科学に革新をもたらした。当時この手術は術者は立ち患者は椅子に座して相対し、手指を以て開眼し、角膜切開は角膜刀（槍状刀）を以てその下方全周の約三分の二程も切開して水晶体を娩出した。彼は、ダビエル匙の考按その他色々の工夫をしたが、結局槍状刀を使用する下方切開法で終った。ダビエル白内障手術の光景はマルセイユ美術館にメイン Etienne Mein 筆の名画が所蔵せられているし、彼がはじめて摘出手術を施行したサンテスプリ病院（現 Hotel-Dieu）前庭にダビエル記念像がたてられている。

わが国においても白内障墜下法手術は盛んに行なわれ、その術式には改良するところが少なくない。シーボルト渡来前後の頃には、馬島流、竹内流、土生流、田原流など日本眼科四家と称して有名であったが、是等は何れも白内障手術を以て知られていた。当時わが国ではその手術の詳細については秘伝と称して公開しなかったが、現存の断片史料から推すに諸流派で行った白内障手術は何れも墜下法に終始したものであった。ダビエル発明の摘出法は、輸入洋書によって多少の知識はあっても、到底実施するものはなかった。この手術実施にあたっては、可なり長い間、患者の眼部が安静に保持せられることと水晶体を虹彩瞳孔領から娩出するため散瞳が必要であった。従来、シーボルトの光学的虹彩切除術については説かれたものがあるが、その白内障手術については言及したものがなかった。私は、昭和四十二年（医譚三〇周年記念大会）に私蔵 高 良斎訳著「泰西眼科必読」（この書は、従来知られている訳著「西説眼科必読」と全く同じもの）の

白内障手術に関する事項を挙げて、高　良斎がシーボルトの許で修得した白内障手術について発表した。

本書の原典はドイツ語本 Johann August Tittmann 1774-1840 著 Lehrbuch der Chir. zu Vorlesungen Leipzig 1800-2 で、そのオランダ語訳本 Leerboek der Heelkunde van J.I.A. Tittmann door A. van Hout 1817 Amsterdam の眼科の部を和訳したものであるが、良斎自ら内容を検討してシーボルト眼科を添加し、更らに、眼科医として良斎の臨床経験を加筆している。単なるチットマン外科書眼科部の直訳書ではない。即ち、本書（「眼科必読」）によって、シーボルト渡来当時の西洋眼科の大要とシーボルト眼科とを知ることが出来る。

本書（巻三）に収載されている白内障手術を紹介すると次の様である。

(1)　手術の適応（許針症）

㋑合併症なきこと　㋺光覚のあること　㋩瞳孔対光反応正常　㋥軽度な虹彩後癒着は差支なし　㋭中年者は少年者よりも手術結果がよい。㋬近視眼は手術後それが治することあり　㋣手術後、視力不良者は眼鏡の助けを借るべし

(2)　手術前の準備

㋑　手術前半時許り前に、阿片二―三グレンを砂糖に研和して与う。㋺莨菪煎剤を以て瞳孔を散大せしむ。莨菪和名ハシリドコロ深山陰地に生ず、（以下前文と同様）

(3)　医師（手術者）と患者との位置

西洋では椅子に坐せしめて術を施す。我邦に於ては仰臥せしめて施術す。医師患者の頭上に坐し、右眼のときは右手を使用す、左眼のときは患者の脇側に坐して右手を以って刺す。想うに我邦の便宜なるにしくはなし。

(4)　手術々式

㋑摘出法（剔出法）

此手術は記載すると言えども、親しく煉熟せる師に従って見聞するに非んば不能なり。余　シーボルトの行なう処を

実験せり。摘出したる灰白内障を舌上に載せ味うに鹹かりき。此法実に称誉するに耐たり、然れども行い難き症あり。

㈡墜下法（下墜法）

下墜法に至りては吾輩家秘の術、穏妥にして功西医にゆずらず。家厳錦国（良斎の義父）特に此術に長ぜり、余も今に至る迄自ら行うて功を着ざること少し。

四、むすび

シーボルが渡来してわが眼科に大きな影響を与えたことは明確である。しかし、その渡来百年記念当時には稍誇張して顕彰された傾向がある。又、史説にも若干検討を要する点を認める。

(1)シーボルト自身は、散瞳薬、和名ハシリドコロ浸剤を秘薬とは考えていなかった。

(2)彼の渡来以後その伝授によって次第に実用し始めていた。

(3)土生玄碩は、当時幕府最高眼科医官としての立場から、その入手をあせりすぎた。

(4)当時国禁の将軍家紋服贈与は、三回に亘って行なわれ、むしろ、玄碩の方から進んで贈呈した。

(5)シーボルト事件発生後約十日後にその居宅から土生氏贈与の紋服が見つかり押収された。シーボルトは何故この期間内に国禁の品を隠匿しなかったのであろうか。

(6)白内障摘出手術の手技は、シーボルトによって伝授せられた。しかし、その手技が未熟であったので失敗例多く、従来の墜下法にまさる術式とは信じられなかった。シーボルトの高弟高　良斎も旧来の墜下法を推奨した。

（昭和四八年十月十日記）

主要文献

(1) 小川剣三郎著　稿本日本眼科学史（明治三七年一九〇四年）
(2) 土生玄碩先生第百五十年記念会贈位祝典記事（大正五年一九一六年）
(3) 福島義一著　日本眼科史．日眼全書第一巻第一分冊（昭和二九年一九五四年）（同書日本に於ける散瞳薬の歴史一二一―一二六頁図譜文献参照）
(4) 山賀　勇著　世界眼科史と日本眼科史　日眼全書第一巻第二分冊（昭和二九年一九五四年）
(5) 板沢武雄著シーボルト人物叢書四五（昭和三五年一九六〇年）
(6) 中泉行正著日本眼科史明治前日本医学史第四巻（昭和三九年一九六四年）
(7) 福島義一著高　良斎著「泰西眼科必読」と同書に収載せられた白内障手術に関する事項　医譚第五三号（昭和四二年一九六七年）

吉益東洞顕彰碑除幕式が行われる

去る十一月十日に広島市において吉益東洞の顕彰碑の除幕式がおごそかに行われた。顕彰碑は広島医師会館の前庭に建立されたが、非常にモダンな形で、医師会館の建物との調和がとれるように配慮されている。これは未来に向って飛翔するが如き形を示し、吉益東洞の万病一毒の理念を象徴したものであった。作者は空充秋氏。

除幕式の前夜に中国新聞社のホールで小川鼎三氏の吉益東洞を中心にした江戸時代の医学の思潮について講演があり、ひきつづき西丸和義氏の吉益東洞の学徒としての姿を西洋の学問と比較しながら豊富なスライドを使って、流暢な話をすすめられ、聴衆を魅了した。

広島県は日本の医史学の泰斗富士川游氏の生地でもあり、ここでこのような催しが行われたことに、富士川先生の血が脈々と流れていることを感慨深く、改めて感じた。

書評

「放射線医学史」舘野之男著

岩波書店発行

「放射線医学史」といってもレントゲン先生のX線発見以来、未だ八十年にも満たない今日、医学史全体の厖大な流れからすれば奇異な感じとみる向きもあるかも知れない。しかし前世紀末のX線、ラジウム発見など黎明期から現在までの短期間に於けるこの分野の進歩は瞠目すべきもので特に第二次大戦後、電子工学の進歩やラジオアイソトープ導入に寄与する診断並びに治療技術の飛躍的進歩、また原爆後遺症など放射線障害に対する一般人の認識等も相俟って医療に占める放射線医学の比重は益々増大する一方である。

ところで医学史的考察といえば停年後、或はそれに近い碩学家によって表わされるのが常のようであるがこの書の著者、舘野氏は新進気鋭、働き盛りの学徒である。放射線医学の如く急速に発展を遂げつつある学問を始発点から現時点まで概観するには氏のように綿密且、柔軟性のある頭脳の持主にして始めて可能となるといっても過言ではなかろう。

現在の放射線医学は余りにも厖大な体系を有するために近年は臨床面でX線診断学、放射線治療学、ラジオアイソトープを主とする核医学、基礎面で生物学、物理学、障害及び防護など専門的分野に分化する傾向にある。この書はこれらの各部門の成立とその発展的過程について千数百に及ぶ文献的考察を行なうと共に単なる温故知新的発想でなく前向きに著者の卓見を折り込んだ点で医学史というよりはむしろ放射線医学全般に亘る概論といった方が適切かも知れない。これまで我が国の放射線医学史に関する書としては後藤五郎名誉教授の労作「放射線医学史考」・明治大正篇及び昭和篇（昭和二十年まで）があるのみであった。最近のように専門分野に細分化すると自分の守備範囲が手一杯で他の分野を詳しくのぞく余裕がなくなりがちであり、この書のように放射線医学全体の広汎な領域について概論的に解説されたものは類がないので一般医家のみならず放射線関係者にとっても誠に便利である。無論、個々の専門家にとっては食い足りない点も多かろうが本書の目的が歴史的アプローチから放射線医学を綜覧することにある以上、当然であろう。

尚、最近問題になりつつある診療にまつわる放射線障害や防護、最大許容線量の概念などにまで言及している点から放射線医学関係者だけでなく実地医家にも一読の価値ある書と思われる。

東京医科歯科大学助教授　堀内淳一（放射線科）

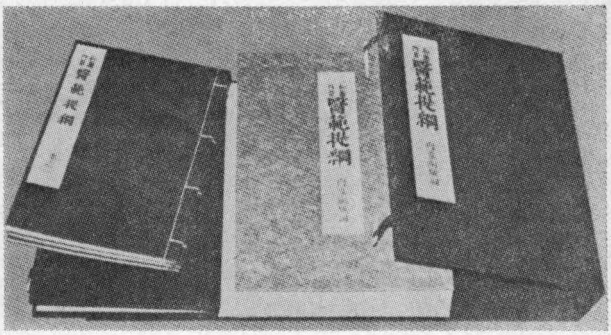
和蘭内景

医範提綱

和蘭内景

医範提綱

内象銅版図



全三巻

全一冊

限定版 三〇〇部

頒価三八、〇〇〇円

●解説

順天堂大学教授　小川鼎三

宇田川玄真（一七六九～一八三四）の著「和蘭内景医範提綱」は文化二年（一八〇五）の出版で、十九世紀の前半、西洋医学に志をもつ日本人が、おそらく誰でもがまず繙いた一書であったとおもう。解剖学を主とするが、生理学、病理学をも合せ説いていて、西洋医学の精髄を明快、簡略に紹介した傑作である。三年後の文化五年にその付図として「内象銅版図」が刊行された。これは亜欧堂田善の作である。日本で最初の銅版解剖図として名高い。おそらくこの付図は当時でも高価であったと推測する。

玄真は西洋の解剖書数種から訳しとって遠西医範三十巻をつくったが、厖大なので、その綱要をまとめて医範提綱と名づけ、この提綱をテキストにして門人に西洋医学の大体を講義した。門人の諏訪俊士徳がそれを筆記し整理して、医範提綱三冊本ができ上ったのである。玄真が用いた西洋解剖書の著者としてブランカルツ、パルヘイン、ヘルヘインインスロウの名が挙げられている。医範提綱は日本の医学に大きい影響をあたえたが、その一つの現われとして、「膵」や「腺」の字が初めて玄真の創始した国字として登場している。

売捌所／株式会社**金原商店**

製作所／財団法人**日本医学文化保存会**

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費として年額三〇〇〇円を前納する。入会者は一〇〇〇円を納入する。ただし外国に居住する会員は年額一五ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条　評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条　本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内（東京都文京区本郷二の一の一）に置く。

第九条　本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条　会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（一月、四月、七月、十月）末日とする。

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担　表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校　正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別　刷　別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部医史学研究室内　日本医史学会

編集委員　大鳥蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シヅ、樋口誠太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

編集顧問　小川鼎三、A・W・ピーターソン

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会　長　緒方　富雄
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
会計監事　宗田　一
理　事
赤松　金芳　阿知波五郎　石川　光昭
今田　見信　内山　孝一　大塚　敬節
大矢　全節　緒方　富雄　蒲原　宏
佐藤　美実　杉　靖三郎　鈴木　正夫
鈴木　勝　宗田　一　津崎　孝道
戸苅近太郎　中野　操　三木　栄
矢数　道明　吉岡　博人　和田　正系
幹　事
大塚　恭男　酒井　シヅ　杉田　暉道
谷津　三雄

日本医史学会評議員氏名（五十音順）

赤松　金芳　安芸　基雄　阿知波五郎
青木　一郎　石原　明　石田　憲吾
石川　光昭　今市　正義　今田　見信
岩治　勇一　内山　孝一　大鳥蘭三郎
大塚　敬節　大塚　恭男　王丸　勇
大矢　全節　緒方　富雄　小川　鼎三
大滝　紀雄　片桐　一男　川島　恂二
蒲原　宏　金城　清松　神原悠紀田郎
酒井　シヅ　酒井　恒　佐藤　美実
清水藤太郎　杉　靖三郎　杉田　暉道
鈴木　勝　鈴木　宜民　鈴木　正夫
瀬戸　俊一　関根　正雄　宗田　一
高木圭二郎　高山　担三　田中　助一
津崎　孝道　津田　進三　筒井　正弘
土屋　重朗　戸苅近太郎　中泉　行正
中川　米造　中沢　修　中西　啓
中山　沃　長門谷洋治　中野　操
服部　敏良　福島　義一　藤野恒三郎
本間　邦則　富士川英郎　古川　明
丸山　博　松木　明知　三浦　豊彦
三木　栄　三廼　俊一　谷津　三雄
山形　敬一　矢数　道明　山下　喜明
山田　光胤　安井　広　吉岡　博人
和田　正系　以上

編集後記

本号は昨年の総会で行われた特別講演とシンポジウムの特集にした。シーボルトが医師としてどの程度の力を持っていたかを率直に論議したのは今回がはじめてであった。

今年は解体新書発刊二百年にあたりその記念事業の計画が進められている。総会には解体新書に何らかのかたちで関係のある演題に限つたために、今年の総会で発表をしようと予定されていたのに、左記の越旨からはずれたという方もいると思う。その方には例会、あるいは本誌上にて発表されんことを望んでいる。万一、原著として発表されるまでにはまとまつていないが、発表する価値のあるものは「研究余滴」の欄に投稿して下さい。（S）

昭和四十九年一月二十五日　印刷
昭和四十九年一月三十日　発行
日本医史学雑誌　第二十巻　一号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　日本医史学会
代表　小川鼎三
〒一一三　東京都文京区本郷二―一―一
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替　東京一五二五〇番
製作協力者　金原出版株式会社
医学文化保存会
〒一一三　東京都文京区湯島二―三一―一四
印刷者　五協印刷有限会社
〒一七四　東京都板橋区南常盤台一―二―三

9) Steven Blankaart *De Nieuwe Hervormde Anatomie, offe ontleding des Menschen Lichaems gebouwed op de waaragtigste en nauwkeurigste ondervindingen dezer Eeuw.* Amsterdam, Jan ten Hoorn, 1686.

10) Steven Blankaart, same title as 1686, completed by *een Verhandelinge van het Balsemen der Lighamen nooit voor desen dusdanig bekend gemaakt.* Amsterdam, Jan ten Hoorn, 1696.

11) Joa. Vesling, *Konstige Ontleding des menschelijken Lichaems*, translated by Gerard Blasius. Amsterdam. Gerrit Sweerman, 1661. Joanni Veslingii Mindani *Syntagma Anatomicum cum Commentariis exhibente Gerardo Blasio.* Ultrajecti, apud Anthonium Schouten, 1696.

12) Philippus Verheyen, *Anatomie oft Ontleed-kundige Beschrijvinge van het Menschen Lichaem.* Translated from the Latin by And. Domin. Sassenus. Tot Brussel, bij't Serstevens, 1711.

13) Joh. Adam Kulmus *Ontleedkundige Tafelen, benevens daartoe behoorende afbeeldingen en aanmerkingen etc.* In het Nederlands vertaald door Gerard Dicten. Amsterdam, bij de Janssoons van Waesberge. 1734.

14) Albrecht von Haller *Biblitotheca Anatomica* I Lib. V p. 320 ed. by Gunther Mann, 1969.

15) Frederik Ruysch, *Opera Omnia.* (Collected anatomical, medical and surgical works). From the Dutch edition Amsterdam, 1744.

16) Serrurier 1129, 解体発蒙, par Mitani Siyosyu Osaka, 1813.

17) *Syntagma Anatomicum*, tab. XXI.

18) Kulmus, p. 97.

19) Kulmus, p. 199.

20) Th. Bartholin *Vasa lymphatica nuper Hafniae in animantibus inventa et in homine.* Hafniae, 1653. Also published in *Opuscula Nova*, Leyden 1670, p. 110.

21) E. D. Baumann *François de le Boë Sylvius.* Leiden E. J. Brill 1949, p. 67.

22) Blankaart, 1696, p. 25.

23) Blankaart, 1678, p. 42. Bartholin, 1688, p. 110.

24) René Descartes, *Tract. de Passione Animae.* Part I, Art. 31.

25) Kulmus, *agde Tafel*, quoted from p. 95.

26) Bartholin, 1696, p. 371.

27) Blankaart, 1696, p. 371.

28) Blankaart, 1696, p. 96.

29) Ph. Verheyen. *Animadversiones in anatomicum Blancardianum*, Leuven 1693. Quoted from J. Banga, *Geschiedenis der Geneeskunde en hare beoefenaren in Nederland*, Leeuwarden 1668.

30) Steven Blankaart *Nadere Verhandelinge van den Omloop des | Blouds door de vezelen en deszelfs Klap. vliezen.* Appended to the 1678 edition of the *Nieuw Hervormde Anatomie.*

Craanen and others. All of the books are written in the typical Renaissance style, in other words with considerable attention to the Classical authors, but they also contain the newer findings cast in the Christian allegorical mould of Calvinism. The illustrations are borrowed from Vesalius, Giulio Casserio, Bartholomeus Eustachius, and other seventeenth-century investigators, particularly with respect to the detailed structure of the vascular system.

REFERENCES

1) Genpaku Sugita, *Dawn of Western Science in Japan*, translated by Ryozo Matsumoto, M. A., Ph. D., and Eiichi Kiyooka, Director of the International Center, Keio University. Hokuseido Press 1969.

2) *Ibidem*, p. 24.

3) Serrurier, L. *Bibliothèque Japonaise.* Catalogue raisonné des livres et des manuscripts Japonais enregistrés à la Bibliothèque de l'Université de Leyde. Leiden 1896. nr. 1133. 重訂解体新書銅版全図, par Sugita Genpaku et Otsuki Gentaku, Miyako, Yedo, Osaka 1826.

4) Eustachii Bartholomaei. *Tabulae Anatomiae*, ed. Jo. Maria Lancisius, Romae 1714.

5) Achiwa Goro, *The Influence of European Medicine on Japanese Surgery.* A summary of the Special Lecture at the sixty-fourth General Meeting of the Japanese Society of the History of Medicine. Osaka, April 3, 1963.

6) Pedro Lain Entralgo, Conceptos fundamentales para una historia de la anatomia. *Arch. Ibero-Americanos de Historia de la Medicina.* Vol. I 1949, pp. 419-423.

7) Thomas Bartholini *Anatome ex omnium Veterum Recentiorumque Observationibus inprimis Institutionibus b. m. Parentis Caspari Bartholini ad circulationem Harveyanam et vasa lymphatica quintum renovata.* Lugd. Bat. apud Jacobum Hackium, 1686.

Thomas Bartholin's *Anatomia Nova*, a standard work reprinted many times in Leiden after 1641, is based on the *Institutiones Anatomicae* written by his father Caspar Bartholin, who perfected himself in anatomy mainly in Italy in the first decades of the seventeenth century. In all of the editions the author kept his father's traditional divisions.

8) *Ontleding volgens den omloop des bloeds en nieuw gevonden watervaten.* In het Latijn beschreven door den Heer Thomas Bartholin Carparszoon. Translated by A. H. S. V. P. D. M. D. Amsterdam. Wed. Joh. van Someren, 1688.

which had been discovered and enthusiastically described by his contemporaries. This ascription was not in itself unusual, for after all the Holy Book was held to contain all truth—even things man had not yet discovered. Blankaart's choice fell on the Book of Ecclesiastes, chapter XII, verse 6. In this Chapter the Bible speaks of a silver cord that is loosed. Blankaart held that this cord, which according to the theologians was a symbol of the bond between the body and the soul, could very well be the thoracic duct. The Bible text goes on to speak of the pitcher broken at the fountain. In this pitcher Blankaart saw a symbol for the heart—a heart in the sense of William Harvey, one that could cause the blood to circulate[30].

Johan Adam Kulmus refers to this explanation in his footnotes to his twenty-first Plate, but does not go into the subject. In general, these five compendia are rather chary with explanatory, annotating, or moralizing references to the Bible, but the circulation of the blood was a sore subject, because in the opinion of the theologians this concept disturbed the relationship between the soul and the body and attacked Aristotle's doctrines. The researchers persisted, however, often in Bla nkaart's way, by demonstrating, with Bible in hand, that there was no real disturbance and that in fact the Creator should be admired for the ingenious composition of his creatures.

Summary

In the Dutch textbooks on anatomy published during the last few decades of the seventeenth century a structure can be distinguished from which a concept can be derived that is characteristic of Baroque anatomy, which was introduced into Japan in 1772 by Sugita Genpaku and was worked out there in the following period. The compendia under discussion can be shown to be based on the *Fabrica* of Vesalius, and give considerable space to Harvey's view of the circulation of the blood and the research done in the seventeenth century on the lymphatic system. The functions of the organs are explained by a combination of the Classical physiology of Galen and theories taken from the chemiatric school of François de le Boë Sylvius and the late-Cartesianism expounded at the end of the seventeenth century by Theodoor

materia subtilis, which contains scented particles that are inhaled into the nose with the air. These particles collide with the ends of the olfactory nerves and cause them to move so that the brain "understands what the nose smells."[27] Blankaart makes things even more complicated when he proceeds to interpret Sylvius' concepts of effervescence and fermentation on the basis of the corpuscular theory. According to him, fermentation of the blood consists of a detachment of the blood corpuscules, effervescence in an adhesion of a round corpuscule to a crescent shaped particle.[28] The observations of Antoni van Leeuwenhoek, who studied the course of the blood in the capillaries in the tail of an eel, undoubtedly lent support to the corpuscular theory. Blankaart was severely attacked by Philip Verheyen about his "reformed anatomy" which Verheyen sneeringly called his "deformed anatomy."[29] Verheyen maintained more reserve than the others toward both chemiatrie and Cartesianism, which earned him the praise of Herman Boerhaave, who was to oppose them energetically in his first lectures, especially the corpuscular theories. Johan Adam Kulmus, who borrowed extensively from Verheyen, avoided the controversy and the use of Sylvius' terms as well, clinging to the simple explanations of the Ancients, which he indicated in his footnotes.

The thoracic duct and the Bible

It was of the greatest importance for the seventeenth-century scholar in the Calvinistic Low Countries that the new concept of the human body be reconcilable with the views of the established Church. Cartesianism had provoked the anger of the theologians because it regarded the human body as a machine whose activities could be explained by clever reasoning. Bitter opposition to what was called the heretical distortion of Aristotle's teaching flared up several times, particularly in the University of Leiden. Steven Blankaart did not belong to Leiden, but his respect for Theodoor Craanen and his admiration for Descartes brought him his share of attention from the theologians. Perhaps this was what led him to attempt, in his first edition of the *Hervormde Anatomie*, to ingratiate himself with the powerful clergyman by inferring a place in the Bible for the lymphatic system,

spirits" through the nerves[24], dissections showed that there were sometimes small calculi or other concretions in the epiphysis of the gland.[25] Furthermore, the authors reasoned, the organ was a gland and the function of a gland is secretion. Kulmus added to his critical comments an exhaustive discussion in which he recapitulated the places mentioned by the Ancients as seats of the soul. Bartholin clearly esteemed the "new and agreeable view,"[26] whereas Blasius only mentioned Descartes in passing in his commentary on Vesling, giving his main attention to Thomas Willis' discussion of the anatomy of the brain.

Regarding the seat of the soul Descartes was not taken seriously by the various authors, but they, and particularly, Blankaart, did adhere to the Cartesian theories of matter, which had been developed in medicine during the last half of the seventeenth century. In the seventeenth century the theories of matter were derived from the Ancients, who were being read again by the humanists in their search for new doctrines that would explain the world better than Aristoteles' conclusions. Instead of qualities and properties, particles and motion now became favorite tools for the explanation of matter. These ancient doctrines of a. o. Democritus of Abdera were dressed in a new garb or modified by such famous philosophers as Pierre Gassendi and René Descartes. Especially the Cartesian theories found their way into Dutch medicine. They were also favoured by Theodoor Craanen (1620-1690), a Leiden professor born in Germany. Blankaart admired his work, being a convinced Cartesianist himself. He incorporated Craanen's physiology in his *Anatomia Reformata* of 1696, steadily supporting René Descartes and his corpuscular theory. According to the corpuscular theory, many processes in the body are explainable as an interaction between pores and particles or corpuscules, which form the basic elements of the air as *materia subtilis*, the fluids and the solid parts. The *materia subtilis* also had a penetrative capacity and could bring everything into motion. The shape and motion of the particles determined the sensation or physiological activity induced in the body. The corpuscular theories are clearly illustrated by the description of the sense of smell. Blankaart adopts Craanen's Cartesian concept when he speaks of the

concepts, i.e. acid and alkali, which were ubiquitous in nature. Every one who made beer or wine knew the concept of fermentation, which Sylvius defined as the separation of the components of a mixture as a result of the dissolving of the salt that bound them. Sylvius also introduced the concept of effervescence. Effervescence was aggregration, in the sense of the binding of an acid with an alkali, a phenomenon accompanied by fizzing.[21] Sylvius used these two concepts to explain the process of digestion, the circulation of the blood, and the role played by the lymph, and argued that the *spiritus vitalis* originated by a chemical process, as a heat-releasing effervescence.

Steven Blankaart incorporated Sylvius' views into his *Hervormde Anatomie*, although he was critical of Sylvius' theories and especially about the chemical aspect of the *spiritus vitalis*. Nevertheless, Blankaart applied the effervescence concept to respiration, basing himself on Sylvius' theory that air particles contain a salt of a salpetre-like and weakly acid nature. The dark venous blood would come into contact with the "aero-salt" and undergo a change in composition by effervescence, the released heat being expired.[22]

In relation to digestion, *chemiatrie* found wider acceptance. The famous experiment of the young Reinier de Graaf with pancreatic juice was mentioned in detail by the authors of the compendia as were the discussions on the taste of the juice.

According to Sylvius, the juice would have to be acid to undergo effervescence in the duodenum when it made contact with the alkalic bile, which came from the gall bladder. De Graaf did not want to oppose his teacher, although he had himself found the pancreatic juice to be tasteless. Blankaart adhered to the critics of Sylvius; he denied the acid taste of the juice and by doing so denied Sylvius' theory of digestion[23].

In the Netherlands physiology was strongly influenced by the mechanical philosophy of René Descartes, and his ideas also appeared in the compendia, in two forms. The most frequently cited of Descartes' views concerned the pineal gland as seat of the soul. Most of the authors questioned this hypothesis. Although Descartes assumed that the pineal gland had a light, delicate structure to enable it to send the "animal

with numerous annotations from ancient and contemporary authors. This tendency to "canonize" was common in the seventeenth and eighteenth centuries, and made the books thicker if less original. Steven Blankaart's *Hervormde Anatomie* of 1696 is three times thicker than the first edition of 1687, but the basic concept of the human body as the author saw it can be found in its entirety in the first edition.

Physiologia nova

It need hardly be said that Harvey's discovery of the circulation of the blood had consequences not only for contemporary thinking on the structure of the human body but also for ideas concerning the functions of the organs and metabolism. Although the authors of the compendia were dealing with anatomy, they could not help wondering what purpose the organs served and how they functioned. As a result, the "new anatomy" rapidly led to a "new physiology", and the authors lost no time in inserting the experiments of their contemporaries into the texts. For the rest, physiology was still founded entirely on the traditional Classical ideas of the three spirits, that determine life. According to this theory, these three spirits-the *spiritus vitalis*, the *spiritus naturalis*, and the *spiritus animalis*, resided in the heart, the liver, and the brain, respectively. Harvey's discovery that the heart is a pump more or less eliminated the spiritus vitalis. Thomas Bartholin had effectively dethroned the liver[20] when he discovered that the chyle was transported to the cysterna chyli, not to the liver, so the natural spirit also lost its importance. These discoveries shook Classical physiology and encouraged the seventeenth-century researcher to perform experiments and formulate new theories.

These theories found their way into the compendia. In our context the most interesting example is perhaps the chemiatrie of François de le Boë Sylvius (1614-1672). This Leiden professor found a great following for this theory on physiology. He compared the human body with a laboratory in which chemical reactions proceed in retorts and tubes. Seventeenth-century chemistry was more closely related to alchemy than to modern chemistry. But Sylvius tried to explain the humours of the human body more scientifically. He used two familiar

In any case it is certain that all of the Baroque compendia were based on Renaissance anatomy and that the Galenistic concepts of organ structure were replaced by post-Vesalian anatomy. But does this mean that all of Galen's work was set aside ? This question must be answered in the negative. Where purely descriptive and topographic anatomy was concerned, Vesalius' views on the structure of the human body dominated. But as soon as the functions of the organs had to be dealt with, we again see the Classical physiology appear in its seventeenth-century garb. Before going into this point, it will be useful to examine the second structural aspects of the compendia—the way in which authors of Greek and Roman times were cited.

The "Plinian style"

The seventeenth-century author was afraid to omit anything. Simple descriptions unaccompanied by anecdotes and historical details are seldom to be found in these textbooks. Quite the contrary—every attempt was made to leave nothing out, and reference was invariably made to the traditional accounts found in the Classical works. The work of Plinius Secundus Major, the Roman author, was highly respected as a source of items elucidating Nature. There are several seventeenth century editions of his *Historia Naturalium*, some in Dutch, all of them annotated with the findings of more recent authors. This way of discussing a subject was favoured by the authors of the anatomical compendia, especially in the early editions. For instance, in Bartholin's third chapter, which deals with fat, the author mentions that Pliny says that fat pigs can be gnawed by mice without feeling it. Kulmus' commentary on his Plate I even includes sixteen pages of biographical data on famous physicians who had devoted themselves to anatomy. But in his descriptions of the Plates themselves Kulmus does not diverge from his subject; any explanations and historical information are reserved for the annotations. Steven Blankaart's editions are provided with lists of the authors he cites, and he rarely mentions them in the text.

The remarkable things are that the Latin editions of, for instance, Johannes Vesling and Caspar Bartholin have far fewer quotations. Gerard Blasius in particular ornamented Vesling's *Syntagma Anatomicum*

was incorporated into the text itself or indicated in footnotes. For example, Kulmus substituted the ten pairs of cerebral nerves described by Willis for the traditional seven pairs, adding an amusing mnemonic rhyme he had learned from Philip Verheyen, whose influence on Kulmus was considerable[18].

Although anatomy had been "reformed" by the seventeenth-century findings, the illustrations in the compendia lagged behind the text or were on lower scientific level. This is a well-known phenomenon frequently encountered in the anatomical textbooks. Not every anatomist had a Jan Stefan van Calcar, a Gerard de Lairesse, or a Christofer Wren to call on! New copper plates after the original drawings were often made for the representation of the organs, or copper plates were bought at auctions and corrected before being used again.

As torsos illustrating the anatomy of the organs of the chest and abdomen, Kulmus tended to use the stiff figures drawn by Joannes Vesling, to some of which he added elaborately dressed hair. Bartholin used the elegant and graceful torsos of Vesalius. Bartholin's copies are accurate reproductions, but Kulmus, like Verheyen, combined some of the torsos and made corrections in the drawings, which simplified the anatomy but at the same time reduced the accuracy. Blankaart did not use torsos, confining himself to illustrations showing the organs individually.

Kulmus must have used pictures from Vesalius' *Fabrica* as well as muscle preparations from Giulio Casserio and a few direct copies, such as the one of Laurentius Heister's tongue. His greatest lag is seen in his illustrations pertaining to the nervous system. The pictures of the brain, which deviate appreciably from Vesalius, are quite poor. He omitted, for instance, the circle of Willis, an error which immediately crept into the Japanese version. The most original of the illustrations is the twenty-first plate showing the flow of chylus, which Kulmus says is based on the autopsy findings in a fifty year old man[19]. In this cadaver the thoracic duct had been injected with milk. The cysterna chyli at first appeared to be double but had, according to Kulmus, only one lumen. Nevertheless, the drawing gives the impression of representing a pathological change in the thoracic duct.

and start with the abdomen, which is logical enough for a time in which satisfactory preservatives for cadavers were not available. The Leiden professor Johannes van Horne (1621-1670) kept the limbs of cadavers in brine, but they were hardly suitable for study after this treatment.[15] For the same reason, the thorax was opened after the abdomen, and only then the brain pan. The brain was boiled or immersed in oil, and it may be considered a minor miracle that even as eminent scholar as Niels Stensen was able to make such excellent observations on this organ.

The new anatomy

There is every reason to assume that Harvey's views on the circulation had completely replaced the Galenic ideas in Baroque anatomy. The works of Thomas Bartholin in particular are full of praise for the English scholar. The 1688 edition, which was intended to replace Thomas Staffard's out-of-print Dutch translation, again carried the letters in which the Leiden professor Johannes Walseus (1604-1649) confirmed Harvey's findings. The seventeenth-century anatomist was also deeply impressed with the discovery of the flow of the chylus, the anatomy of the thoracic duct, and the pattern of the vessels of the lymphatic system. This is clearly evident, too, in the Japanese textbooks, in which the traditional string-of-beads pattern of the injected lymph vessels is illustrated[16].

The main purport of the concept termed *renovata* or *reformata* was thus the incorporation of discoveries in this field into the text. To this end, Steven Blankaart rejected the traditional division of the text and started his 1686 edition with the structure and action of the heart. Gerard Blasius added to the *Syntagma Anatomicum* not only a commentary but also an appendix in which all the new findings in the field of anatomy are mentioned. Here we find too the diagrams of the spinal nerves by Thomas Willis[17] (1621-1675), Niels Stensen's work on the parotid and lacrimal ducts, Nathanael Highmore's (1613-1685) study on the vascularization of the spleen and pancreas, and the experiments of Reinier de Graaf (1641-1693) on the pancreatic secretion. In the early eighteenth-century compendia, as in that of Kulmus, this new anatomy

3. Classical physiology was gradually replaced in these compendia by the experimental physiology of the seventeenth century, which was under the influence of the mechanical philosophy.

4. The authors present the "new anatomy" in terms of the Christian allegorical ideas of Calvinism.

These four elements will be discussed on the basis of five compendia known to have been consulted in some edition or other or applied in some way in the preparation of books published in Japan : the *Anatomia Nova*[7] by Thomas Bartholin, mentioned by Genpaku, in both the Latin edition of 1686 and the Dutch edition of 1688[8] ; the *Nieuwe Hervormde Anatomie* by Steven Blankaart in the editions of 1678, 1686[9] and 1696[10] ; the *Syntagma Anatomicum*[11] by Johannes Vesling, which was translated into Dutch by among others Gerard Blasius in 1661 and re-issued in Latin with a commentary by the translator in 1696; and the already-mentioned work of Philippus Verheyen[12] as well as the *Tafelen* of Kulmus[13], who drew heavily on Verheyen.

In his *Bibliotheca Anatomica* the celebrated physician Albrecht von Haller (1708–1777) refers to such compendia as books written in the "secular" style[14]. By this he meant, with a touch of irony, that the authors did not correct the omissions of the ancient writers and neither gave their own judgement nor reported their own experiments. They arranged their books systematically according to the traditional manner of the anatomical dissection, in which the body was divided into three main parts : the head, the chest, and the abdominal cavity, the limbs being treated under muscles and skeleton. The osteology is treated separately, with a description of the joints and ligaments. With respect to the nervous system, attention is given mainly to the brain and spinal cord. It was not until the nineteenth century that the peripheral nerves received more attention. In these compendia the topographical anatomy of the limbs is barely mentiond. The peripheral blood vessels are illustrated in vascular diagrams of the human body like those found in Vesalius and Eustachius for the venous system in particular, as was customary in the Classical tradition.

The oldest compendia keep closest to the tradition of the dissection

medicine (1820—1855), and the importation of medical knowledge pertaining mainly to pathology (1866-1880)[5]. This means that the anatomical information that reached Japan was still based principally on the anatomy that was in vogue before the publication of Xavier Bichat's *Anatomie générale*. Around 1800, anatomy underwent a revolution which put an end to the highly detailed systematization of the eighteenth century and made room for the development of histology, topographical anatomy, and the experimental research of such scientists as François Magendie and Claude Bernard. Eighteenth-century anatomy was in fact little more than a refinement and working out of Baroque anatomy, and added little that was really new to the current knowledge of the structure of the human body.

What is actually meant by Baroque anatomy? Lain Entralgo[6] calls it an architectonic anatomy, that is to say, anatomy built upon the Fabrica of Vesalius, but with a monumental refinement and highly detailed presentation of the structures of the body. All the anatomical data in question are to be traced to the important discoveries of the sixteenth and seventeenth centuries. In the presentation of the material the refinement of the vascular system dominates, together with the structure of the glands and the results of meticulous dissection of such complicated structures as the spleen and the lungs. This Baroque Anatomy had dominated Europe for a whole century and was to maintain its dominance in Japan for several more decades.

Structure of the compendia

In general, it may be said that the compendia taken as models during the introduction of European anatomy into Japan all contain four elements that determined the structure of each of the books:

1. They all adhere to the "new anatomy" (*anatomia nova*); in other words, they are based on Vesalius' concept of the human body and give considerable attention to the circulation of the blood as described by William Harvey.

2. All of these compendia are written in the traditional style of the Renaissance; that is, the descriptions of the human body are annotated with the opinions of the ancient and more recent authors.

and surgery, because the surgeons—who had no academic training—usually could not read Latin. Such books were published in large editions by the well-known Amsterdam printers, among them the Janssons van Waesberge, who published the ***Ontleedkundige Tafelen*** by Kulmus, and Jan ten Hoorn, who printed three editions of ***De Nieuw Hervormde Anatomie*** by Steven Blankaart. Another well-known volume in Dutch was the ***Anatomie oft Ontleedkundige Beschrijvinge aan het Menschen Lichaam*** by Philip Verheyen, professor at Louvain from 1689 until his death in 1710, which was translated from the Latin in 1711 by Andreas Dominicus Sassen and was published in Brussels by 't Serstevens.

But the Latin compendia, too, found their way to Japan, being used for the illustrations rather than as source for the text. Genpaku recounts that he was able to obtain a copy of Kulmus' ***Ontheedkundige Tafelen*** as well as one of Caspar Bartholin's Anatomia Nova[2].

If we leaf through the anatomy text book prepared by Sugita Genpaku and Otsuki Gentaku, which appeared in 1826[3], we find the familiar muscle figures of Bartholomeus Eustachius, the famous anatomical prints discovered by Lancisi in the Vatican Library[4]. It is therefore safe to assume that the ***Rangaku*** had a strongly European character from the very start, as is clearly expressed in both the text and illustrations of the Dutch compendia. Nevertheless, the form and content were unmistakably Dutch. The objective of the present report is to discuss in some detail the characteristic presentation of anatomy in the texts and illustrations. There can be no doubt that in the translation of the text into Japanese much of the cultural background was lost, for example by the omission of the footnotes to the Kulmus ***Tafelen*** and the impenetrability of the references to Greek and Roman mythology and the Bible. Nonetheless, these elements, which form an inseparable part of the traditional concept of scientific work in the seventeenth century, are an important source for a better understanding of the intellectual world in which the physicians of the factory at Deshima were trained.

Goro Achiwa indicates three periods in which European medicine was introduced into Japan, starting with the transmission of the medicine of the Leiden School (1750-1850), the importation of vitalistic

Anatomia Reformata. The Dutch Handbook of Anatomy from the Baroque Period; the Contents and Presentation

by

Dr. A. M. Luyendijk-Elshout*

Introduction

In 1974 it will be two hundred years since the first Japanese translation of an European textbook of anatomy was published in Edo. The volume concerned was written by a German named Johan Adam Kulmus, who was professor of Medicine and Physics at Danzig. This book, which had been published in Danzig in 1722 under the title ***Anatomische Tabellen*** and was translated into Dutch in 1734 by a Leiden surgeon named Gerard Dicten, was taken as model by the Japanese physician Sugita Genpaku for his ***Kaitai Shinsho***, the first textbook on Western anatomy to appear in Japan. The preparation of this volume is described by Genpaku in detail in a manuscript entitled ***Rangaku Kotohajime*** (1815), which was published in English[1] in 1959, making it possible for the Western reader to follow the fascinating story of how this Japanese anatomist mastered Baroque anatomy, which was founded on the monumental work of Andreas Vesalius.

The Westernization of Japanese medicine started in 1774 and was completed gradually over a period of about a hundred years, during which important contributions were made by Philip Franz von Siebold and Johannes Lydicus Catharinus Pompe van Meerdervoort, to name only two. In the course of that century a large number of medical books were translated from the Dutch into Japanese, but this does not mean that the Japanese restricted themselves to Dutch authors. In Europe, although the medical literature was accessible to all physicians since almost all of it was in Latin, translations of textbooks and collected works were often needed, especially in the fields of anatomy

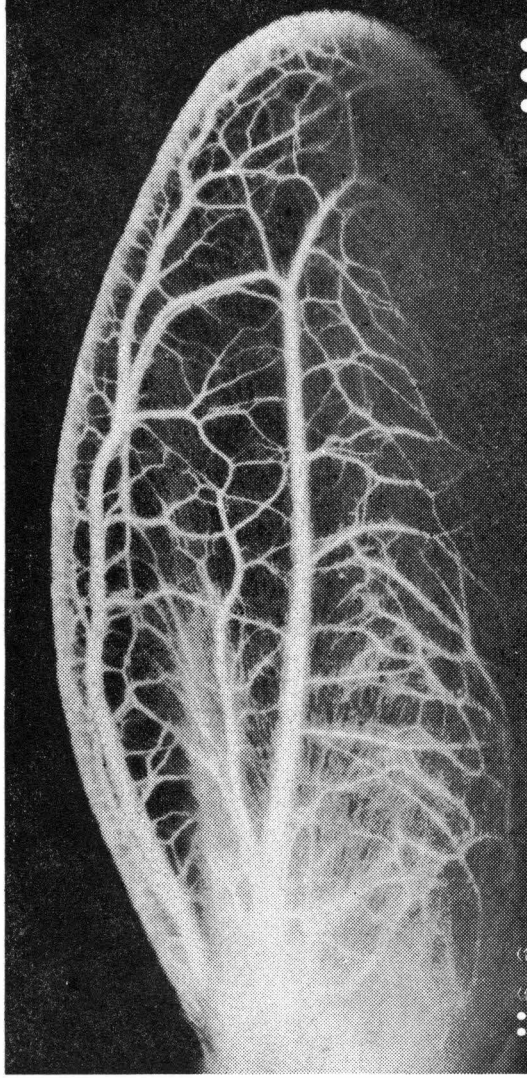
* Department of Anatomy, University of Leiden, The Netherlands

●自社開発の新しい血行改善剤

血行障害に メグリン®錠

(一般名：ヘプロニケート)

●血管拡張作用
●脂質代謝改善作用
●プラスミン活性化作用



〈包装〉錠(100mg)(コード番号：Y-MEXO)
：100・1000・3000錠
〈健保適用〉
●〈使用上の注意〉等については現品説明書をご参照ください。
●文献等ご要望の向きは吉富製薬学術部(大阪市東局区内)まで。

製造＝吉富製薬株式会社
販売＝武田薬品工業株式会社

306-B2

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 20. No. 1 Jan. 1974

CONTENTS

The 74th General Meeting of theJapan Society of Medical History
Special Lectures Commemorating the 150th Anniveversary of Siebold's Landing at Dejime
Siebold and His Pupils ……Tomio OGATA…(1)
Anatomia Reformata. The Dutch Handbook of Anatomy from the Baroque Period; the Contents and Presetation
……A. M. KUYENDIJK-ELSHOUT…(104)
Symposium: Siebold as a Physician
Prescriptions of Siebold……Teizo OGAWA…(40)
Japanese Painters Influenced by Siebold
……Mamoru KANESHIGE…(46)
Siebold and Choshu District……Sukeichi TANAKA…(53)
Siebold's Medical Treatment……Misao NAKANO…(59)
The Role of Siebold in the History of the Dutch Learning ……Jiro NUMATA…(64)
Siebold as a Physician……Shoichi YAMAGATA…(71)
Siebold in the History of Ophthalmology in Japan ……Giichi FUKUSHIMA…(76)
Miscellaneous……(86)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo